秘

貴重書

民事訴訟法議案

日本學術振興會

一橋大學附屬圖書館藏

NB500
M41
2

序

日本學術振興會第一（法律學、政治學）常置委員會は昭和八年十月其の最初の會合に於て、維新以降我國の立法資料の蒐集に關する小委員會を設置することに決定した、之が即ち第九小委員會である。

右第九小委員會は其の劈頭の事業として、法典調査會に於ける民法法典案の審議の速記錄を印刷し、引き續いて刷了したのが左記の通りである。此等の速記錄及法案等は原本が一部僅に司法省に存するのみであつて、若し火災等の危險を考へるならば、眞に慄然たらざるを得ないのであるが、今、此の印刷が完了して日本學術振興會、司法省研究室、東京帝國大學法學部圖書室、京都帝國大學法學部圖書室、東北帝國大學附屬圖書館、九州帝國大學法文學部、慶應義塾大學法學部法學研究室圖書館及早稲田大學圖書館に夫々それを保管することが出來るやうになつたのは、誠に結構な次第である。

此等の印刷には、昭和十六年六月から同年十二月まで七箇月の日子を費した。尙、之に付て司法省の當局が直接間接に多大の援助を與へられたことを、茲に深謝する。

昭和十七年三月

元第九小委員長　加藤正治

附記

第九小委員會に屬した委員の氏名は左の通りである。

加藤正治　田中耕太郎
池田寅二郎（以下片假名順）　寺尾元彦
烏賀陽然良　中島玉吉
織田萬　長島毅
大森洪太　永田安吉
金森徳次郎　穂積重遠
川島信太郎　牧野英一
神戸寅次郎　松宮順
栗原正　三潴信三
栗山茂　山川端夫
坂野千里　山田三良
清水澄　米澤菊二
末廣重雄　尾佐竹猛
立作太郎　岡田朝太郎

記

一、商法　一冊
一、民事訴訟法草案議案意見書　一冊
一、民事訴訟法議案　一冊
一、日本訴訟法案（オットー・ルドルフ氏手記）（獨逸文）　一冊
一、モッセ氏意見書　一冊
一、不動産ニ關スル强制執行議案　一冊
一、民事訴訟法案第七編第二章以下調査案（二種）　二冊
一、再修正民事訴訟法第七編第二章以下調査案　一冊
一、舊民法編纂沿革　一冊
一、法典調査會規程　一冊
一、法典調査會ノ方針議事規則等　一冊
一、書記執務心得等　一冊
一、法典調査會特別委員擔任年月日調（甲、乙）　二冊
一、法典調査會總裁副總裁及委員任免一覽表（明治三十一年六月以降ニ在職シタル者）　一冊
一、聯合會日誌　一冊
一、撰要永久錄　御觸留　七十九冊（合本八冊）
一、撰要永久錄　公用留目錄　一冊
一、撰要永久錄　公用留　四冊（合本一冊）
一、撰要永久錄　御用留　八冊（合本一冊）

東京都立中央図書館

民事訴訟法講義

第一回

民事訴訟法草案

第一編　總則

第一章　裁判所

第一節　事物ニ付テノ裁判所ノ管轄

第一條　事物ニ付テノ裁判所ノ管轄ハ帝國裁判所構成法ニ依テ之ヲ定ム

第二條　裁判所ノ管轄カ爭訟物ノ價額ニ依リ定マル時ニ限リ以下數條ノ規定ヲ適用ス

第三條　起訴ノ日時ハ價額ノ計算ヲ定ム

（過代金ヲ包ム）

果實、利息、（人賃）過代金ヲ包含シタル損害及ヒ裁判上又ハ裁判外ノ費用ハ之ニ付テノ請求ヲ法律上相牽連スル本請求ニ附帶シテ同一ノ訴ニ於テ爲ストキ（即チ附帶請求トシテ爲ス時）ハ之ヲ算入セス

第四條　一ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求ハ前條ノ算入セサルモノ

XB500
N 1
15

チ除クノ外之チ合算ス

本訴ト反訴トノ爭訟物ノ合算ハ之チ爲ス事チ得ス

第五條　爭訟物ノ價額ハ左ノ如ク之チ定ム

第一　內國本位貨幣ノ定マリタル金額ノ供給ニ付テノ請求ガ爭訟物ナルトキハ其呼高ニ依ル

第二　債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保チ爲ス從タル物權カ爭訟物ナル時ハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第三　地役カ爭訟物ナルトキハ地役カ要役地ニ在テ有スル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲ノ受役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ニ在テ地役ノ有スル所ノ價額ヨリ多キ時ハ其減シタル額ニ依ル

第四　賃借權又ハ永借權ノ契約ノ有無又ハ其時期カ爭訟物ナル時ハ爭アル時期ニ當ル賃借價ノ額ニ依ル但一个年賃借價ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キ時ハ其二十倍ノ額ニ依ル

第五　定時ノ供給又ハ入額ニ付テノ權利カ爭訟物ナル時ハ一个年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條　爭訟物ノ價額ハ之チ必要トスル場合ニ於テハ裁判所ハ~~前條~~第三條乃至第五條）ノ規定ニ從ヒ其意見チ以テ之チ定ム」

~~數條~~一　裁判所ハ價額ニ付キ申立アリタル時ニ依リ其價額ノ證明チ命シ又ハ其職權チ以テ檢證若クハ鑑定人ノ鑑定チ命スル事チ得

第七條　地方裁判所ノ判決ハ其事件區裁判所ノ事物ニ付テノ管轄ニ屬スヘカリシトノ理由チ以テ之ニ對シ上訴シテ不服チ申立ツル事チ得ス

第八條　區裁判所又ハ~~地方裁判所~~カ事物ニ付テノ管轄ニ付キ管轄違ナリトノ言渡~~地方裁判所ガ~~アリテ其言渡確定シタル時ハ此裁判ハ後ニ其事

十六日

件ノ屬スヘキ裁判所ヲ拘束ス

第九條　地方裁判所ガ事物ニ付テノ管轄ニ付キ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スル時ハ地方裁判所、原告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ同時ニ其爭訟ヲ原告ガ指定シタル已レノ管轄内ノ區裁判所ニ移送ス」

區裁判所ガ事物ニ付テノ管轄ニ付キ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スル時ハ區裁判所ハ判決ヲ以テ同時ニ其爭訟ヲ上級ノ地方裁判所ニ移送ス

移送ニ付テノ申立ハ判決前（ニ係属）口頭審問ノ終結ヨリ以前ニ之ヲ爲スヘシ

移送ヲ言渡シタル判決確定シタルトキハ其爭訟ハ移送セラレタル裁判所ニ屬スルモノトス（看做）

第二節　地域ニ付テノ裁判所ノ管轄（裁判籍）

第十條　人ガ其普通裁判籍ヲ有スル裁判所ハ其人ニ對シ起スヘキ

民訴草ノ三

總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ軍團裁判籍ヲ定ノサル場合ニ限ル

人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依テ定マル

未定

第十一條　現役ノ軍人軍團ハ裁判籍ニ付テハ（現役ノ）兵營地又ハ（詳細定營地）ヲ以テ住所トス但此規定ハ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍團ニハ之ヲ適用セス（家族從者ヲ包含ス）

未定

一月六日再議

第十二條　外國ニ在テ治外法權ヲ有スル本邦人及ヒ外國ニ仕官セサルタル本邦官吏ノ（本人ノ）（本邦ニ於ケル出發前有セシ）

都市吏ハ裁判籍ニ付テハ本邦ニ有セシ最後ノ住所ヲ保存ス若シ此住所ナキハ（時）東京ニ於テ之カ爲メ司法大臣ノ命令ヲ以テ定ムヘキ東京内ノ區ヲ以テ住所トス

未定

同斷

第十三條　内國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ（内國ニ於テノ）本人ノ現在地ニ依リ定マル若シ其現在地ガ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ

未定

一月六日
再勝決

其最後ニ有セシ内國ノ住所ニ依テ定マル

然レ供外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ内國ニ於テ生シタル權利關係ニ限リ前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起ス事ヲ得

前項ノ起定ハ官吏ニ非スシテ治外法權ヲ有スル本邦人ニ之ヲ適用セス

第十四條　國ノ普通裁判籍ハ爭訟ニ付キ國ヲ代理スルノ任アル官廳ノ所在地ニ依テ定マル民事爭訟ニ付キ國ヲ代理スルニ付テノ規定ハ關會ヲ以テ之ヲ含ム

公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルヽ事ヲ得ル會社若クハ其他ノ社團并キ參相建設所、公設所、財團ノ普キモノノ通裁判籍ハ其所在地ニ依テ定マル此所在地ハ別段ノ證ナキ時ハ事務所ナキカ又ハ數所ニ時ハ其一所ニ於テ事務ヲ取扱フ時ハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

一月六日
再勝決
御預ケ

第十五條　生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者及ヒ其他本性ニ因リ一定ノ地ニ永ク寓在スヘキ者ニ對スル財產上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起ス事ヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍團ニ對シテハ其兵營地ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起ス事ヲ得

第十六條　製造、商業又ハ其他ノ營業ノ爲メ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ニ於テ之ヲ營ム時ハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關係ヲ有スル訴ヲ起ス事ヲ得

前項ノ裁判ハ住家及ヒ農業建ヲ有スル地所ヲ其所有者用收者又ハ賃借人トシテノ耕程スル者ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴ハ地所ノ耕程ニ付テノ權利關係ニ關スル時ニ限ル

第十七條　内國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所

ニ之ヲ起ス事ヲ得。債權ニ付テハ債務者ノ住所ヲ以テ其債權ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負ヒタル時ハ亦其物ノ所在地ヲ以テ其債權ノ所在地トス

第十八條　契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ解除又ハ其不履行若クハ不充分ノ履行ニ關スル賠償ニ付テノ訴ハ其爭訟ニ係ル義務ヲ履行スヘキ地ノ裁判所ニ之ヲ起ス事ヲ得

第十九條　會社又ハ其他ノ社團カ普通裁判籍ヲ有スル裁判所ニ此等ノモノヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タルモノヽ資格ニ基ツキタル請求ニ付テノ訴ヲ起ス事ヲ得

第二十條　不法ノ行爲（不正ノ加害、犯罪及ヒ准犯罪）ニ付テノ訴ハ責ニ任スル者ニ對シ其行爲（加害ノ所爲）ヲ爲シタル地ノ裁判所ニ之ヲ起ス事ヲ得

第二十一條　辯護士又ハ執達吏ノ手數料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ爭訟物ノ價額如何ヲ問ハス本案訴訟ノ第一審判所ニ之ヲ起ス事ヲ得

第二十二條　不動產ニ付テハ其不動產所在地ノ裁判所ハ總テノ物上ノ訴殊ニ權原並ニ占有ノ訴及ヒ派分並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

地役ニ關スル訴訟ニ付テハ受役地ノ所在地ニ依ル

第二十三條　物上裁判籍（第二十二條）ニ於テハ從タル擔保權（債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物件）ニ付テノ物上ノ訴ニ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ併ス事ヲ得

物上裁判籍ニ於テハ不動產ノ所有者若クハ占有者其モノニ對スル人權ノ訴又ハ不動產ニ加ヘタル損害ニ係ル訴ヲ起ス事ヲ得

第二十四條　相續權、賠償又ハ其他死亡ニ原因スル處分ヨリ生スル請求又ハ相續ノ派分ニ付テノ訴ハ遺產者其死亡ノ時普通裁判

轄ヲ有シタル裁判所ニ之ヲ起ス事ヲ得

相續ノ裁判籍ニ於テモ亦遺產債主カ遺產者又ハ相續人其モノニ對スル請求ニ付テノ訴ヲ起ス事ヲ得但遺產ノ全部又ハ一分其裁判所ノ管轄區內ニ存在スル時又ハ相續人數人アリテ未タ遺產ヲ分カタサル時ニ限ル

草ノ說裁判管轄ハ延シ

第二十五條　原告ハ數箇ノ管轄裁判所ニ對キ選擇スル事ヲ得

第四節　上級裁判所ノ爲ス管轄裁判所ノ指定（裁判管轄ヲ定ムルノ訴）

第二十六條　管轄裁判所ノ指定ハ帝國裁判所構成法ニ定メタル場合ヲ除クノ外左ノ場合ニ於テ之ヲ爲ス事ヲ得

第一　各種裁判所ニ普通裁判籍ヲ有スル數人カ共同訴訟人トシテ訴ヘラルヘク且其爭訟ニ付キ共同ノ特別裁判籍ヲ有セサル時

第二　物上裁判籍ニ於テ訴ヲ起スヘク且其物カ數箇ノ裁判所ノ管轄區內ニ存在スル時

第二十七條　管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス爲メ

第一　帝國裁判所構成法第十六條第二ニ依テ定メタル場合ニ於テハ其差支アル裁判所ノ直近上級裁判所

第二　其他ノ場合ニ於テハ數箇ノ裁判所ヲ自己ノ管轄區內ニ有スル直近上級裁判所

第二十八條　管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

其裁判所ハ口頭審問ヲ要セスシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス

以上
一月六日

第四節　裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條　當然管轄權ヲ有セサル裁判所ハ原告被告ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其關係ヨリ生スル爭訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條　被告カ管轄違ナリトノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭審問ヲ受ケタル時ハ亦前條ト同一ノ効力ヲ生ス

民事訴訟法新草案　第貳回

第三十一條　左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス

第一　財産上ノ請求ニアラサル爭訟ニ係ル時

第二　訴ニ付キ事物上又ハ地位上ノ專屬管轄アル時

第五節　裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條　判事ハ帝國裁判所構成法又ハ其他ノ法律ニ定メタル場合ヲ除クノ外左ノ場合ニ於テハ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル

第一　判事自ラ原告若クハ被告タル時又ハ爭訟ニ係ル請求ニ付キ原告被告ノ一方若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スル時

第二　判事又ハ其婦カ原告被告ノ一方若クハ雙方又ハ其親屬（配偶者親屬）又ハ親屬タ

（刑法第百十四條及ヒ第百十五條ニ定メタル親屬）

一月六日

ルノ緣故アル時但血族又ハ姻戚ノ原由タル關係ニ在セサル時モ亦同シ

第三　判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クル時又ハ訴訟代理人タルノ委任ヲ受クル時若クハ受ケタル時又ハ法律上ノ代理人ト爲ルノ權利ヲ有スル時若クハ之ヲ有シタル時

第四　判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事（又ハ仲裁人）トシテ參與シタル時但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ囑託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラルヽ事ナシ

第三十三條　判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルヽ場合及ヒ總テ偏頗ノ恐（時ハ總テノ場合ニ於テアル）場合ニ於テハ原告又ハ被告（各方）ヨリ之ヲ忌避スル事ヲ得

判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スヲ慮フニ足ルヘキ情況アル時ハ偏頗ノ恐アルカ爲メノ忌避ヲ（之ヲ忌避スル事ヲ得）爲スヲ得

第三十四條　判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルヽ場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其爭訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス原告又ハ被告之ヲ爲ス事ヲ得又偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告又ハ被告其知リタル忌避ノ理由ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述シタル時ハ最早其判事ヲ忌避スル事ヲ得ス

第三十五條　忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス

忌避ノ理由ハ之ヲ疎明スル事ヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述　其疎明ノ用ニ充ツル事ヲ得

原告又ハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述シタル上其判事ヲ偏頗ノ恐アルカ爲ノ忌避スル時ハ

忌避ノ理由カ其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ知リタル事ヲ陳明スヘシ

第三十六條　忌避セラレタル判事カ合議裁判所ニ屬スル時其裁判所其忌避ノ申請ヲ裁判ス忌避セラレタル判事ハ其申請ニ付テノ裁判ヨリ除斥セラル若シ其裁判所カ右判事ノ退去ノ爲メニ決定ヲ爲ス事能ハサルニ至ル時ハ直近上級裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事カ忌避セラレタル時ハ上級地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ理由アリト流フル時ハ裁判ヲ要セス

第三十七條　忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭審問ヲ要セスシテ之ヲ爲ス事ヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ聯絡上ニテ陳述スヘシ

第三十八條　忌避ノ申請ヲ理由アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲ス事ヲ得ス又其申請ヲ理由ナシト宣言スル決定ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第三十九條　忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルニ至ルマテハ總テノ行爲ヲ避クヘシ然レトモ偏頗ノ恐アルカ爲ノ忌避セラレタル判事ハ豫防スヘカラサル行爲ヲ爲ス事ヲ要ス

第四十條　忌避申請ノ完結ヲ管轄スル裁判所ハ右ノ申請アラサルモ其忌避ノ理由タルヘキ情況ニ付キ判事ヨリ申出ヲ爲ス時又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラルヘキノ疑ヲ生スル時モ亦裁判ヲ爲ス

裁判ハ豫ノ原告被告ヲ訊問セスシテ之ヲ爲ス其裁判書ハ之ヲ原告被告ニ發達スル事ヲ要セス

第四十一條　本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ亦之ヲ適用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

事由ヨリトハ同條ヲ云フ

（原草案第四十八條乃至第五十一條ハ刪除ス）

第二章　原告被告

第一節　訴訟能力

第四十二條　原告被告カ其關係スル爭訟ヲ自ラ爲シ又ハ其委任シタル訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムルノ能力（訴訟能力）ト法律上ノ代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代理ト法律上ノ代理人ノ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別委任ノ心要トハ民法ノ規定ニ依ル

第四十三條　外國人ハ自國又ハ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スル時ハ訴訟能力ヲ有スルモノトス

此規定ノ爲メ法律上ノ代理人カ訴ヲ起シ又ハ爭訟ヲ引受クル事ヲ妨ケラレス

第四十四條　裁判所ハ爭訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス其職權ヲ以テ訴訟能力、法律上ノ代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル委任ニ闕欠ナキヤ否ヲ審察ス

裁判所ハ其意見ニ於テ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリトシ且其闕欠ヲ補正シ得ヘシトスル時ハ原告被告又ハ其法律上ノ代理人トシテ出頭シタル者ニ其闕欠ヲ補正スルノ條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許ス事ヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ闕欠補正ノ爲メ一ノ期間ヲ定ムヘシ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲ス事ヲ得ス但闕欠ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭審問ノ終結マテ之ヲ追完スル事ヲ得

第四十五條　訴訟無能力者又ハ相續人ノ定マラサル相續又ハ知レサル遺產相續人ニ對シ訴ヲ起スヘキ時ハ其事件ノ繫關スヘキ裁判所ノ部長ハ法律上ノ代理人アラサル場合ニ於テ遲滯ノ爲メ危害アラハ相手方ノ申請ニ因リ此等者ノ爲メニ特別ノ代理人ヲ任スヘシ

右申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得其裁判ハ口頭審問ヲ要セスシ

日本學術振興會

裁判テ之ヲ爲ス其決定書ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタル時ハ其任セラレタル代理人ニモ亦之ヲ送達ス

申請ヲ却下スル裁判決定ニ對シテハ抗告ヲ爲ス事ヲ得

裁判所部長ヨリ任セラレタル特別ノ代理人ハ法律上ノ代理人又ハ相續人ノ出願スルマテ訴訟ヲ爲ス事ニ付法律上ノ代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十六條　第十五條ニ揭ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者其理在地又ハ兵營地ノ裁判所ニ訴ヘラルヘキ時其法律上ノ代理人他ノ地ニ住所ヲ有スルニ於テハ遲滯ノ爲ノ危害ナシト認モ前條ニ從ヒ代理人ヲ任スル事ヲ得

其他裁判決定ニ對シ抗告ヲ爲スヲ許サヽル（スヲ除ク）ノ外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

以上七日

民事訴訟法新草案

第三回

法律上理由ノ同一ナルモノ

同種類ノ者

第二節　共同爭訟人仲間

第四十七條　左ノ場合ニ於テハ原告又ハ被告數人ノ當事者數人カ共同爭訟人トシテ相共ニ訴ヘ又ハ訴ヘラルヽ事ヲ得

第一　原告又ハ被告數人ノ當事者數人カ爭訟物ニ付キ權利共通ノ地位ニ立ツ時

第二　同一ナル事實上及ヒ法律上ノ理由ニ基ケル請求又ハ義務カ爭訟ノ目的物タル時

第三　本質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ理由ニ基ケル同種類ナル請求又ハ義務カ爭訟ノ目的物タル時

第四十八條　如何ナル場合ニ於テ共同爭訟人仲間カ必要ノモノタルヤハ民法ノ規定ニ依テ定マルヲ依ル

第四十九條　總テノ共同爭訟人ハ共同爭訟人タル資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立スルモノニシテ其共同爭訟人中ノ一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ

我国爭訟人ノ利益ニ於テ効ヲ生セス

第四回　案件法廷審理

民事訴訟法講義

第五十條　然レ供爭訟ニ係ル權利關係カ總テノ共同爭訟人ニ對シテ不可分ニノミ確定セラルヽ事ヲ得ヘキ時ニ限リ左ノ規定ヲ適用ス」

共同爭訟人ノ攻擊及ヒ防禦ノ方法（一切證據ヲモ包含ス）ハ亦他ノ共同爭訟人ノ利益ニ於テ効力ヲ生ス

共同爭訟人中ノ唯一人（或ル者）カ爭ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同爭訟人カ悉ク爭ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

若シ共同爭訟人中ノ或者ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタル時ハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ因（依）テ代理セラレタリト看做ス然レ供懈怠シタル共同爭訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲スヘキ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲ス事ヲ要ス其懈怠シタル共同爭訟人ハ何時タリ供其後ノ訴訟手續ニ再ヒ參加スル事ヲ得

（原草案第六十七條ハ刪除ス）

第三節　第三者ノ爭訟參加

日本學術振興會

第五十一條　他人ノ間ニ權利拘束トナリタル爭訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲メニ請求スル第三者ハ此爭訟（第一訴訟）ノ權利拘束ノ終ニ至ル迄第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ原告被告雙方ニ對スル訴（主參加）ヲ爲シテ其請求權ヲ伸張スル事ヲ得

第五十二條　第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトヲ問ハス當事原告、當事被告若クハ參加原告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付キ確定裁判ヲ爲スマテ之ヲ延期スル事ヲ得

延期ノ申請ハ第一訴訟ノ繫屬シタル裁判所ニ之ヲ提出スヘシ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ提出スル事ヲ得

決定ハ口頭審問ヲ要セスシテ之ヲ爲ス事ヲ得

延期ヲ命スル決定ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第五十三條　他人ノ間ニ權利拘束トナリタル爭訟ニ於テ其一方カ勝訴トナル事ニ付キ權利上ノ利害ヲ關係ヲ有スル者ハ爭訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ノ補助ノ爲メ之ニ附隨スル事ヲ得

第五十四條　從參加人ハ其附隨スル時ノ爭訟ノ程度カ妨ケサル限リハ其附隨スル主タル原告又ハ被告ノ爲メニ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有効ニ行ヒ殊ニ主タル原告又ハ被告ノ爲メニ存スル期間内ニ故意、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲スノ權利アリ

異議ヲ場合ニ於テ從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告又ハ被告ノ陳述及ヒ有爲ノ行爲トノ相抵觸スル場合ニ於テ主タル原告又ハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準トス但民法ノ規定ニ因リ之ト異ナル事ノ生スル時ハ此限ニ在ラス

第五十五條　附隨ヲ許スヘカラストシテ卻ケラレタルモノニアラサ

日本學術振興會

八十二條ト共ニ預ケ

ル從參加人ハ其爭訟ヨリ裏ミ退キタル時ト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ爭訟ニ付キ爲シタル確定裁判カ不當ナリシトノ主張ヲ爲ス事ヲ得ス」又從參加人ハ其附隨ノ時ノ爭訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スル事ヲ妨ケラルヽ時又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラサリシ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過怠ヲ以テ施用セサリシ時ニ限リ其補助シタル原告又ハ被告カ爭訟ヲ不充分ニ爲シタリトノ主張ヲ爲ス事ヲ得

第五十六條　從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ提出ス

申請ニハ原告被告及ヒ爭訟ヲ表示シ又定マリタル利害ノ關係（第五十三條）及ヒ附隨セントスル論述ヲ明示スヘシ

申請ハ主タル原告被告ニ送達スヘシ」從參加ハ亦故障、異議又ハ

一月十三日謄了

上訴ト併合シテ之ヲ提出スル事ヲ得

第五十七條　主タル原告又ハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述ル時ハ原告、被告及ヒ參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭審問ヲ要セスシテ之ヲ爲ス事ヲ得

利害關係（第五十三條）ノ存否ニ付キ爭アル時ハ參加人其關係ヲ疏明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足レリトス

決定ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

參加ヲ許サヽルノ言渡確定セサル間ハ參加人ハ本訴訟ニ參セシノ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又爲サレタル裁判ハ參加人ニ之ヲ送達ス

（原草案第七十六條ハ刪除ス）

第五十八條　參加人ハ原告被告ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル者ニ代リ爭訟ヲ擔任スル事ヲ得此場合ニ於テハ其者ノ申立ニ因リ判決ヲ以

お預ケ

一月廿日再議決

テ爭訟ヨリ之ヲ脫去セシム

第五十八條　參加人ハ原告、被告ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル者ニ代四號リ爭訟ヲ擔任スル事ヲ得此場合ニ於テ附隨サレタル原告又ハ被告迫補入其申立ニ因リ判決ヲ以テ之ヲ後爭訟ヨリ脫去セシムスル事ヲ得

第五十九條　原告又ハ被告其敗訴ノ場合ニ於テ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ起シ得ヘキト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受クヘキ事ヲ恐ルヽ時ハ爭訟ノ權利拘束間第三者ニ爭訟ヲ告知スル事ヲ得」

第三者第四者

爭訟ノ告知ヲ受ケタル各人ハ更ニ爭訟ヲ告知スルノ權利アリ

第六十條　爭訟告知ハ爭訟ノ繫屬スル裁判所ニ其爭訟告知ノ理由及ヒ爭訟ノ程度ヲ記載シタルヘキ書面ヲ提出シテ之ヲ爲スヘシ

書面ハ第三者ニ送達スル事ヲ要ス

爭訟ヲ告知スル原告又ハ被告ノ相手方ニハ書面ノ謄本ヲ付與スヘシ

一月十四日議了

第六十一條　爭訟ハ爭訟告知ニ拘ハラス之ヲ續行ス

第三者其附隨スヘキ事ヲ陳述スル時ハ從參加ニ付テノ規定ヲ適用ス

（原草案第八十一條ハ刪除ス）

（原草案第八十二條乃至第八十四條ハ刪除ス）

第八十二條八十三條八十四條ハ插入ニ可決シタレ供卻ホ「モ」「ホ」ノ意見ヲ聞キタル上ニテ二氏トモ刪除ノ意見ナレハ再議ニ付スル事ニ決ス

民事訴訟法新草案　第五回

未決

第四節　訴訟代人及ヒ輔佐人

第六十二條　此法律ノ規定ニ從ヒ辯護士ニ依レル代理ヲ要セサル時ニ限リ原告被告ハ自ラ爭訟ヲ爲シ又ハ各訴訟能力者ヲ以テ訴訟代人トシテ之ヲ爲ス事ヲ得

第六十三條　訴訟ヲ爲ス爲メノ委任ハ裁判所ノ記錄ニ併フ書面委任ヲ以テ之ヲ證スヘシ

私證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證スヘシ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又ハ官廳町村ノ各官吏之ヲ爲ス事ヲ得

口頭委任ハ口頭辯論期日ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ陳述シ且調書ニ記載セシムル時ハ書面委任ト同一ナリトス

第六十四條　訴訟委任（第六十三條）ハ反訴主參加、放棄、抑價若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ除ク爭訟ニ關スル總

テノ訴訟行爲、代人幷ニ上級審ノ爲メノ訴訟代理人ノ任免及ヒ相手方ヨリ辯償スル費用ノ領收ヲ爲スノ權ヲ特與ス

之ニ反シ訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニアラサレハ再審手續告訴若クハト

相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スルノ權ヲ特授セラレス

第六十五條　訴訟委任ノ法律上範圍ノ制限（第六十四條第一項）ハ相手方ニ對シ法律上ノ効力ナシ

然レ共辯護士ニ依レル代理ヲ除クノ外要セサル時ニ限リ委任ハ各個ノ訴訟行爲ニ付キ之ヲ與フル事ヲ得

正誤

訴訟法草案第六號更正

第六拾五條第三項中　改メタル時ハトアルハ改メタルノ誤

第六十六條　原告又ハ被告ノ訴訟代理人數人ハ共同ニテモ又各己ニ

テモ原告又ハ被告ヲ代理スル事ヲ得委任ニ之ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ法律上ノ効力ナシ

此規定ハ商法ノ規定（第四十五條）第百六十條第二百二十二條）ニ觸レサルモノトス

第六十七條　訴訟代理人カ爭訟ニ於テ委任ノ範圍内ニテ爲シタル訴訟行爲及ヒ不行爲ハ原告又ハ被告ニ對シテハ其自己ノ行爲又ハ不行爲タルト同一ニ關東スルモノトス

然レ共代理人ノ爲シタル事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告又ハ被告ヨリ即時ニ之ヲ廢棄シ又ハ更正シタル時ニ限リ其効力ヲ失フ

第六十八條　委任者ノ死亡、其訴訟能力又ハ其法律上代理ノ變更、委任者ノ方ヨリスル廢罷及ヒ代人數人ノ方ヨリスル解約通知ニ因レル委任ノ消滅ハ委任ノ消滅ヲ通知スルニ至ルマテ相手方ニ對シ屆出ツル、

法律上ノ効力ナシ然レ供辯護士ニ依レル代理ヲ要スル時ニ限リ他ノ辯護士ノ任殺ヲ届出ツルニ至ルマテ相手方ニ對シ法律上ノ効力ナシ

其届出書ハ原告又ハ被告ヨリ又辯護士ニ依レル代理ヲ要スル時ニ限リ任殺セラレタル辯護士ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ及ヒ其裁判所ヘ直リ相手方ニ之ヲ送達スヘシ

代理人ハ解約通知ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲サヽル間ハ其委任者ノ爲ノニ行爲ヲ爲ス事ヲ妨ケラレス

第六十九條　適式ナル委任ノ欠缺ハ原告又ハ被告カ代理セラレサルモノト看做サルヽノ結果ヲ生ス裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ觀察スヘシ

裁判所ハ委任又ハ適式ノ委任ナク(代人トシテ出頭スル者ニ)場合ノ情況ニ隨ヒ費用及ヒ損害ニ付テノ保證ヲ立テシノ又ハ保證ヲ立テシノスシテ原告又ハ被告ニ代ハリテ出頭スル者ニ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許ス事ヲ得、判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲ノ裁判所ノ適宜ニ定ムヘキ期間ノ滿了シタル後始ノテ之ヲ爲ス事ヲ得

第七十條　辯護士ニ依レル代理ヲ要セサル時ニ限リ原告又ハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人トシ又ハ何時タリ供取消ス事ヲ得ル裁判所ノ許可ヲ得タル上他ノ各訴訟能力者ヲ輔佐人トシテ之ト共ニ出頭スル事ヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲ノニ原告又ハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ノ演述シタルモノハ原告又ハ被告即時ニ之ヲ廢棄シ又ハ更正セサル時ニ限リ原告又ハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

民事訴訟法草案　第六回

日本學術振興會

第五節　訴訟費用

第七十一條　敗訴ノ原告又ハ被告ハ爭訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ爭訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨償スヘシ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリシトスルモノニ限ル

受訴裁判所ノ所在地ニ住スル辯護士ニ依レル代理又ハ輔佐ハ常ニ前規定ノ意義ニ於テ相當ナルモノトス

爭訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告被告ハ敗訴ノ原告被告ニ同シ

第七十二條　原告被告ノ各方カ一分ハ勝訴トナリ一分ハ敗訴トナル時ハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分ツヘシ其第一ノ場合ニ於テ各原告被告ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ其一方ヨリ他ノ一方ニ對シ辨償ヲ請求スル事ヲ得ス

四月廿日

然レ供裁判所ハ相手方ノ過分ノ要求カ割合ニ寡少ニシテ且別段ノ費用ヲ生セサリシ時又ハ要求ノ額カ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ定マルノ故ヲ以テ過分ノ要求ヲ容易ニ認クル事ヲ得サリシ時ハ原告被告ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負ハシムル事ヲ得

第七十三條　被告カ酬求ヲ直チニ認諾シ且審理前其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシノタルニアラサル時訴訟費用ハ原告ノ勝訴トナリタルニ拘ラス其負擔ニ歸ス

お預ケ

第七十四條　期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ヲ變更シ、辯論ヲ延期シ、辯論指定ヲ延期シ、審理續行ノ爲メニスル期日ヲ定メ、期間ノ延長シ又ハ其他爭訟ヲ遲滯スルニ至ラシムル原告被告ノ各方ハ之カ爲メ生シタル費用ヲ其本事件ニ於テ勝訴トナリタルニ拘ラス負擔スヘシ

第七十五條　裁判所ハ効ナカリシ攻擊又ハ防禦ノ方法（一切ナカリシ

再調

四月十三日終了

舉證ノ方法ヲ含ム）ヲ主張シタル原告又ハ被告ニ其本事件ニ於テ勝訴トナリタルニ拘ラス其方法ノ費用ヲ負ハシムル事ヲ得

第七十六條　提出シテ効ナカリシ上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告又ハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十七條　之ニ反シ上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分カ廢棄セラルル時ハ爭訟ノ總費用（上訴ノ費用ヲ含ム）ニ付テノ裁判ハ本事件ニ關スル終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲スヘシ

原告又ハ被告前審ニ於テ主張スル事ヲ得ヘカリシ所ノ新タナル事實又ハ攻擊若クハ防禦ノ方法ヲ提出スル事ニ因リ勝訴トナル時ハ其勝訴トナリタル原告又ハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負ハシムル事ヲ得

第七十八條　原告被告爭訟物ニ付キ和解スル時ハ其爭訟ノ費用ハ和解ノ費用ト共ニ相消セラレタルモノト看做ス但原告被告別段ノ合意ヲ爲シタル時ハ此限ニ在ラス

共同爭訟人ノ

第七十九條　民法ノ規定ニ從ヒ費用ニ付テノ其同爭訟人ノ連帶參務ガ民律ノ規定ニ從ヒ其共同爭訟人ハ共同爭訟人ヲ生セサルモノニ限リ相手方ニ對シ平等ニ費用ノ責ニ任ス然レ供共同爭訟人ノ爭訟ニ於ケル參加カ利害關係ノ情況著シク相異ナル時ハ裁判所ハ其參加ノ情況ニ隨ヒ費用ヲ負ハシム中ノ或者カ共同爭訟人ノ一人特別ノ攻擊又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタル時ハ其他ノ共同爭訟人ハ之カ爲メ生シタル費用ニ付キ責其ニ任セス

第八十條　從參加ニ對シ異議ヲ起ス時（第五十七條）ハ之ニ付キ爲ス決定ニ於テ從參加人ト異議ヲ述ヘタル原告又ハ被告トノ間ニ中間爭訟ノ費用ニ付キ第七十一條乃至第七十七條ニ從ヒ裁判スヘシ

參加ヲ許シタル時又ハ異議ヲ述ヘサル時ハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル主タル原告又ハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前記ノ諸條ニ從ヒ裁判スヘシ

第八十一條　費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事

第五十五條ト共ニ預ケ

ヲ許サス其他ノ裁判ニ對シテハ唯本事件ノ裁判ニ對シ許スヘキ上訴ヲ提出シ且追行スル時ニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツル事ヲ得

相手方ヨリ提出シタル上訴ニ從屬スル事ハ其從屬カ唯費用ノ點ニ限リタル時ト雖供之ヲ許ス

第八十二條　裁判所書記、法律上代理人、辯護士幷ニ其他ノ代理人及ヒ執達吏（過怠又ハ懈怠ニ因リ除ケ得ヘキ費用ヲ生セシメタル時ハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ニ依リ決定ヲ以テ其費用ノ辨償ヲ課スル事ヲ得其決定前ニ於テ當事者ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲スノ機會ヲ與フヘシ其裁判ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲ス事ヲ得其決定ニ對シテハ裁判ヲ受ケタル者ハ七日即時ノ期間内ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第八十三條　辨償スヘキ費用額ノ確定ハ權利アル原告又ハ被告ノ申

請ニ因リ爭訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十一條第三項又ハ上訴爭訟取下ノ場合ヲ除クノ外費用ニ付キ爲シタル執行シ得ヘキ裁判ニ因テノミ之ヲ許ス

申請ハ裁判所書記ニ口述シテ其調書ヲ作ラシム事ヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與スルニ供シタル計算書ノ謄本及ヒ各個費用額ノ疎明ニ必要ナル證書ヲ添フヘシ

第八十四條　費用額確定ノ申請ニ付テノ裁判ハ職權ヲ口頭審問ヲ爲サスシテ之ヲ爲ス事ヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ檢査ヲ命スル事ヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲スル前相手方ニ計算書ヲ付與シテ相當ニ定ノラルヘキ期間內ニ陳述ヲ爲スヘキ事ヲ之ニ催告スル事ヲ得

決定ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第八十五條　訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ隨ヒ分ツ時ハ費用額確定ノ決定ヲ爲スル前相手方ハ亦相當ニ定ノラルヘキ期間內ニ其費用ノ計算書ヲ差出スヘキ事ヲ催告セラルヘシ此期間ノ空シク滿了シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ニ拘ラス之ヲ爲ヘシ但相手方カ事後其辯償ノ請求ヲ主張スルノ權利ハ之カ爲ノニ妨ケラルヽ事無シ然レ供相手方ハ事後ノ訴訟手續ニ因リ生スル費用增額ニ付キ責ニ任ス

民訴草ノ二二ノ二

第七回　泰晤士河畔之惨杀

第六節　立保證

（新人）

第八十六條　訴訟上ノ保證ハ原告被告別段ノ合意ヲ爲サヽル際リハ裁判所ノ審見ヲ以テ抵保ニ充分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ預ケテ之ヲ爲スモノトス

第八十六條七　原告タリ又ハ原告ノ有メ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツヘシ

此義務ハ左ノ場合ニ於テハ生セサルモノトス

第一　國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人ガ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツルノ義務ナキ時タル場合

第二　反訴ノ場合

第三　爲替訴訟ノ場合

第四　公ナル催告ニ因リ起サレタル訴ノ場合

四月廿日文字決

第八十七條（八） 裁判所ハ保證ヲ立ルヿ等ヲ爭フ時及ヘ裁判所之ヲ是認スル時ハ之ヲ以テ保證ヲ立ツルヿ等ヲ命シ且保證ヲ立ツヘキ數額及ヒ期間ヲ確定スヘシ

其數額ヲ確定スルニハ被告カ訴ヘヲ付キ見積ニテ支出スヘキ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲スヘシ

立テタル保證ノ不足ナル事カ爭訟中ニ生シ且被告カ追增保證ヲ立ツル事ヲ求ムル時ハ前項ト同一ノ手續ニ依ルヘシ但抵保ニ充分ナル請求ノ部分カ爭ナキ時ハ此限ニ在ラス

第八十八條（九） 確定シタル期間ノ滿了シタル後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告ノ上訴ニ付キ審問ヲ爲スヘキ時ハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言スヘシ

第七節 受救權

第九（九）十九條 何人タリ供自己及ヒ其家族ニ必要ナル生計ヲ害スルニアラサレハ常サニ始マルヘク又ハ既ニ始メラレタル訴訟ノ費用ヲ出タス事能ハサル者ハ其目的トスル權利ノ伸張又ハ權利ノ防禦カ輕卒ナリト見ヘス又ハ明カニ見込ナキト見ヘサル時ハ受救權ノ付與ヲ請求スル事ヲ得

第九十一條 外國人ハ其屬スル國ノ法律又ハ國際條約ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ受救權ヲ請求スル事ヲ得ル場合ニラレタル時ノミニ限リ受救權ヲ請求スル事ヲ得

第九十二條 受救權付與ノ申請ハ爭訟ノ關係ヲ表明シ且無證方法ヲ明示シテ書面又ハ口頭ヲ以テ其付與ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出スヘシ其申請ハ裁判所書記ニ口述シテ其調書ヲ作ラシムル事ヲ得

原告又ハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄各地官廳ヨリ發シタル證書ヲ出タス事ヲ要ス其證書ニハ原告又ハ被告ノ身分及ハ職業、財産幷ニ家族ノ關係及ヒ其納ムヘキ直稅ノ額ヲ明示シテ訴訟費用支拂

四月十四日讀了

市町村トハ同シ

四月廿八日百四十四條聽事中別ル事ニ決ス

此種以下半可

ノ無資力ヲ明カニ認スヘシ此種ノ訴訟ヲ管スル事ニ付キ管轄權ヲ有スル管轄各地官廳ハ內務大臣及ヒ司法大臣ノ共同命令ヲ以テ之ヲ定ム

第九十二條 受救權ノ付與ハ各審ニ付キ各別ニ之ヲ爲ス第一審ニ付テハ強制執行ヲ併セテ之ヲ爲ス

受救權カ前審ニ於テ付與セラレタル時ハ上級審ニ於テハ無資力ノ證ヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタル時ハ上級審ニ於テハ受救權ヲ求ムル原告又ハ被告ノ權利ノ伸張又ハ權利ノ防禦カ輕卒ナリト見ヘ又ハ見込ナキト見ユルヤヲ調査スル事ヲ要セス

第九十三條 受救權ハ其付與ノ條件ノ一カ存セサリシ時又ハ最早存セサル時ハ何時タリ供之ヲ剝奪ス

第九十四條 受救權ハ其權ノ付與セラレタル原告又ハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十五條 受救權ノ付與ニ因リ原告又ハ被告ハ左ノ諸件ヲ得

第一 國庫ニ生シタル現立替金ヲ命セラレタル裁判費用ヲ濟濟スル事ノ猶予(命ヲ含ム)ヲ免除

第二 訴訟費用ノ爲メニ保證ヲ立ツルノ免除

第三 送達及ヒ執行行爲ヲ一時無報酬ニテ爲サシムル爲ノ執達吏ヲ自己ニ添附セシメラルルトノ權利 又辯護士ニ依レル代理ヲ要スル時ニ限リ其權利ヲ一時無報酬ニテ防禦セシムル爲ノ辯護士ヲ自己ニ添付セシメラルルトノ權利 (但必要ナル場合ニ於テハ)

受訴裁判所ハ辯護士ニ依レル代理ヲ要セサル時ト雖モ受救權カ付與セラレタル原告又ハ被告ノ申立ニ因リ重要ノ理由アル時ハ右ノ如キ辯護士ノ添附ヲ命スル事ヲ得

第九十六條 受救權ノ付與ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨償スル法律上ノ義務ニ影響ヲ及ホサス

第九十七條　貧ナル原告又ハ被告カ假リニ濟濟ヲ免除セラレタル訴訟費用ニ付キ其確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔スヘキ相手方ヨリ之ヲ取立ツル事ヲ得

貧ナル原告又ハ被告ニ添附セシメラレタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アル時ハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手數料及ヒ立替金ヲ取立ツル事ヲ得

第九十八條　受救權ヲ許サレタル原告又ハ被告ハ自己及ヒ其家族ニ必要ナル生計ヲ害スル事無クシテ爲シ得ル時ハ濟濟ヲ假リニ免除セラレタル數額（第九十五條第一號）ヲ直チニ追拂スルノ義務アリ

第九十九條　受訴裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キ檢事ヲ審訊シタル後受救權ノ付與并ニ辯護士ノ添附ノ命令ニ付テノ申請、受救權ノ剝奪及ヒ數額（第九十五條第一號）追拂ノ義務ニ付キ決定ス

裁判ハ總ヘ口頭審問ヲ爲ス事ヲ要セスシテ之ヲ爲ス事ヲ得

第百條　受救權ヲ許シ又ハ受救權ノ剝奪若クハ費用追拂ノ命令ヲ否ム決定ニ對シテハ檢事ノミ抗告ヲ爲ス事ヲ得

辯護士ノ添附ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲ス事ヲ得

受救權ヲ拒ミ若クハ剝奪シ又ハ辯護士ノ添附ヲ否ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告又ハ被告ハ抗告スル事ヲ得

民事訴訟法新書案　第八回

第二節　送達

第百十六（三四）條　送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ記レニ囑ヲル（其所屬裁判所ノ）執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行スヘキ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任スヘキ事ヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニテモ亦送達ヲ爲サシムル事ヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏ヲ又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ下ノ規定ニ（スル所ノ）關スル送達吏ト看做ス

第百三十七（三五）條　送達ハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ又送達スヘキ書類ノ正本又ハ證ヲラレタル謄本ヲ交付スルノ成規アル時ハ其正本又ハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

當事者數人ノ代人又ハ（ニ爲シ）同一ナル當事者ノ代人數人中ノ一人ニ爲ス送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ノミヲ交付スルヲ以テ足ル

四月廿七日
終了

第百十八條　訴訟能力ヲ有セサル原告又ハ被告ニ對スル送達ハ其法律上ノ代人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルヽ場ヲ得ル命令官廳、府、縣、郡、市、町、村、社、寺又ハ社團ニ在テハ送達ハ其首長又ハ事務掌管人ニ爲スヲ以テ足ル」レリトス數人ノ法律上代人及ヒ數人ノ首長又ハ事務掌管人ニ在テハ送達ハ其一人ニ爲スヲ以テ足レリトス

若クハ者アル場合ニ於

第百十九條　職海軍ノ現役ノ下士官及ヒ兵卒ニ對スル送達ハ其直近上班ノ司令官廳ノ長官ニ之ヲ爲ス

以下ノ軍人軍屬

第百二十條　囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第百二十一條　送達ハ財産權上ノ爭訟ニ付テハ總理代人ニ之ヲ爲シ又商業ノ營爲ニ因リ生シタル爭訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲シタルヲ以テ原告被告本人ニ爲シタルト同一ノ效力アリ

第百二十二條　訴訟代人カ任セラレタル時ハ送達ハ其代人カ委任ノ旨趣ニ依リ原告又ハ被告ノ代理權ヲ有スル時ニ限リ其代人ニ之ヲ爲ス

ヲ爲スノ

然レ供原告被告本人ニ爲ス送達ハ其本人カ訴訟代人ヲ任シタル時ト雖モ效力アリ

○印ハ不明

獨逸二百六十五條ヲ採用ト

シテ檢○告委員ニ任ス

第百二十三條　受訴裁判所ノ地ニ住居ヲモ又營業場ヲモ有モサル原告又ハ被告ハ其裁判所ノ豫メ發スル命令ニ依リ又內國ニ於テ治外法權ヲ有シ又ハ內國ニ住居ヲモ又營業場ヲモ有セサル原告又ハ被告ハ右ノ命令ニモト雖モ前記ノ地ニ住居シ且內國ノ裁判權ニ服從スル第三者ノ方ニ於テ住所ヲ指定スル事ヲ要ス但其原告又ハ被告カ右ノ地ニ住居シ且內國ノ裁判權ニ服從スル訴訟代人ヲ任シタル時ハ此限ニ在ラス又其命令ハ職權ヲ以テ又ハ申立ニ因リ豫ノ口頭審問ヲ爲サスシテ之ヲ爲ス事ヲ得此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ル事ヲ得ス

御預ケ

民訴草ノ二七

五月十一日此修正案ニ可決ス

修正民事訴訟法草案中

修正第百四十一條第百四十二條ヲ左ノ如ク改ム修正シテ之ヲ一條ト爲ス

第百四十一條　受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ又事務所ヲモ有セサル原告又ハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ撰定シ之ヲ屆出ル事ヲ要ス」假住所撰定ノ屆出ハ遲クトモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ス時ハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ要ス

前項ノ屆出ヲ爲サヽル時ハ總テ其後ノ送達ハ欠缺ノ補正ニ至ルマテハ交付スヘキ書類ヲ裁判所書記又ハ其委任シタル吏員ヨリ原告又ハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ交付シテ之ヲ爲ス事ヲ得此送達ハ其書類ノ原告又ハ被告ニ達スルト否トヲ問ハス又何時ニ達スルトヲ問ハス郵便ニ交付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

一　第百四十三條ハ第百四十二條ト改メ以下之ニ順ス）

第百四十二條（住所撰定ノ屆出ハ遲ク供次ノ裁判上家間ニ於テ之ヲ爲シ又原告又ハ被告カ其前ニ書面ヲ差出ス時ハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ要ス」

前項ノ屆出ヲ爲サヽル時又ハ住所ノ撰定カ前記ノ規定ニ適セサル時又ハ其撰定ヲ廢罷スル時又ハ撰定ノ住所ニ於テ送達ヲ施行スル事能ハサル時ハ總テ其後ノ送達ハ欠缺ノ補正ニ至ルマテハ交付スヘキ書類ヲ裁判所書記又ハ其委任シタル吏員ヨリ原告又ハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ交付シテ之ヲ爲ス事ヲ得送達ハ其書類ノ原告又ハ被告ニ達スルト否トヲ問ハス又何時ニ達スルトヲ問ハス郵便ニ交付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第百四十三條　送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ爲サル（受ク）ヘキ人ニ出會フ地ニ於テ之ヲ爲ス事ヲ得然レ供其人カ此地ニ住居又ハ營業場ヲ有スル時ハ住居又ハ營業場ノ外ニ於テ之ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシ時ニ限リ效力アリ

第百十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ營業場カ存スル時ハ其營業場外ニ於テ法律上代人、首長又ハ事務檢査人ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシ時ニ限リ效力アリ

第百十五條　送達ヲ爲サルヘキ人ニ其住居ニ於テ出會ハサル時ハ住居ニ於テスル送達ハ同居人ニ雇人ニ又ハ同居スル親屬ノ中分別ヲ弁スル者ニ之ヲ爲ス事ヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スル事ヲ得サル時ハ其送達ハ管轄各地官廳ノ戶ニ貼付シ且成ルヘキ丈ケ近隣ニ住居スル者二人ニ送達ノ通知ヲ爲ス事ヲ要ス

管轄各地官廳ハ內務大臣及ヒ司法大臣共同ノ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第百十六條　住居外ニ營業場ヲ有スル人ニ對スル送達ハ其營業場ニ於テ之ニ出會ハサル時ハ其營業場ニ在ル商業使用人又ハ營業使用人ニ之ヲ爲ス事ヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ雖生ニモ亦之ヲ爲ス事ヲ得

第百二十七條　第百十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代人、首長又ハ事務檢査人ニ出會ハス又ハ此等ノ者カ受取ニ付キ差支アル時ハ送達ハ營業場內ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲ス事ヲ得

第百二十八條　第百二十六條及ヒ第百二十七條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サル時ハ送達ハ第百二十五條第二項ニ準シ之ヲ爲ス事ヲ要ス但住居ニ於ケル送達カ施行セラルヽヲ得サルモノタル事ノ明白ナル時ニ限ル

前項ノ場合ニ於テハ營業場又ハ住居ノ戶ニ告知書ノ貼付ヲ爲ス

第百二十九條　送達ノ受取カ法律上ノ理由ナクシテ拒マルヽ時ハ交付セラルヘキ書類ハ送達ノ場所ニ之ヲ差置ク事ヲ要ス

第百三十條　日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲スヘキ送達ハ數

判官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ之ヲ施行スル事ヲ得ス

前項ノ規定ハ郵便ニ交付シテ爲ス送達ヲ除クノ外ハ夜間ニ爲スヘキ各送達ニ之ヲ適用ス午後（日没）時ヨリ午前（日出）時マテノ時間ハ此規定ニ謂ヘル夜間ト看做ス（夜間トハ ノ時間ヲ云フ）

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ（検判一）判事又ハ送達ヲ爲スヘキ地ノ管轄裁判所（ヲスル）所長又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結スヘキ事件ニ在テハ其判事ヨリ之ヲ與フ

許可ヲ與フル命令ハ送達ノ際謄證セラレタル謄本ヲ以テ之ヲ交付スル事ヲ要ス

此條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタル時ハ效力アリ（ニ障リ）

第百五十一條　送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員カ證書ヲ作ル事ヲ要ス其證書ニハ送達ノ地ヽ時（年月日）并ニ方法及ヒ受取ニ付テノ受取人ノ受取ノ證并ニ送達吏ノ署名及ヒ印ヲ載（具備ス證書ヲ作ル）スル事ヲ要ス

百四十一條若シトアルハ此條ニテ百四十二條トナラハ百四十一條ノ二項トハ則チ百四十二條ノ二項ト從テ改メサルヘカラス

四月廿八日了

受取ヲ拒ミ又ハ受取ノ證ヲ爲ス事ヲ拒ミ又ハ受取人（受取人）其證ヲ爲ス事能ハサル旨ヲ述フル時ハ之ヲ送達證書ニ記載スル事ヲ要ス

第百五十二條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ交付ヲ爲シタル官吏（員）ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第百五十三條　外國ニ於テ治外法權ヲ有スル日本人（帝國人及其家族從者）ニ對シ外國ニ於テ施行スヘキ送達ハ其人カ帝國公使館ノ長若クハ公使館員（又）ハ此等ノ人ノ家族又ハ公使館ノ事務員又ハ從者ナル時又ハ帝國領事トシテ職ヲ行フ時ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第百五十二條（前條ノ）其他外國ニ於テ施行スヘキ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ在留スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第百五十四條　通常ノ兵營地外ニ在ル軍隊（出師ノ軍隊）又ハ役ニ服シタル軍艦ノ乘組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲ス事ヲ得

第百三十五條（三）　前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ部長之ヲ發ス

裁判

送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第百三十六條（四）　訴訟代理人原告又ハ被告ノ現在所カ知レサル時又ハ外國ニ於テ爲スヘキ送達ニ付テハ之カ爲メニ存スル成規ニ從フ事能ハス若クハ之ニ從フモ其効ナキ事ヲ預知スル時ハ其送達ハ公ケノ告示ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得

第百三十七條（五）　公示送達ハ（原告又ハ被告ノ申立ニ因リ）裁判所ノ命ニ依リ裁判所書記之ヲ執行ス

其送達ハ交付スヘキ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼付シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ只其裁判ノ部分ノミヲ貼付ス

右ノ外裁判所ハ送達スヘキ書類ノ抜書ヲ官報又ハ外國ノ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載スル事ヲ命スルヲ得其抜書ニハ裁判所ノ原告被告ノ雙方并ニ爭訟ノ表示及ヒ送達スヘキ書類ノ要旨ヲ掲クル事ヲ要ス

第百三十八條（六）　第一回ノ公示送達ハ書類ノ貼付ヨリ又ハ第一節ノ又ハ數節ノ新聞紙ヲ以テスル告示ノ場合ニ於テハ抜書ノ最後掲載ヨリ、十四日ヲ經過シタル日ニ之ヲ爲シタリト看做ス然レ供裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ之ヨリ長キ期間ノ經過ヲ必要ナリト宣言スル事ヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告又ハ被告ニ對シ爲ス其後ノ各公示送達ハ貼付ヲ以テ之ヲ爲シタリト看做ス

第三節　期日及ヒ期間

第百三十九條（七）　期日ハ裁判長期日及ヒ時ヲ以テスル、期日ノ定メハ裁判所ノ部長之ヲ爲ス定ム

第百四十條（八）　期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限リ之ヲ日曜日及ヒ一般ノ

期日ニ定ムル事ヲ得

第百四十一條（五九）　期日ノ爲ノニスル呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記ハ之ヲ以テ之ヲ正本ノ送達ニ因テ必要ナル呼出ヲ爲ス

書記シタル裁判ニ掲ケタル呼出ハ之ヲ送達スル事ヲ要セス但第三者カ呼出サルヘキ場ニ於テ其不在ニテ書渡ヲ爲シタル時ハ此限ニ在ラス

第百四十二條（六）　期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但寫檢ヲ爲シ又ハ裁判所ニ出顯スルニ付キ差支アル人ノ審問又ハ其他裁判所内ニ於テ爲ス事ヲ得サル行爲ヲ爲ス事ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第百四十三條（六一）　期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

期日ハ原告又ハ被告カ呼上ノ際ニモ又審問ノ終結前ニモ出頭ヲ申込マサル時ハ之ヲ怠リタルト看做ス（期日ハ原告又ハ被告ヲ銀サ）

第百四十四條（六二）　裁判所又ハ部長ニ於テ長短ヲ定ムル期間ノ經過ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又此ノ如キノ送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ書渡ヲ以テ始マル但期間ヲ定ムルノ際之ヨリ遲キ起初ヲ定メタル時ハ此限ニ在ラス

第百四十五條（六三）　時ヲ以テ定メタル所謂法律上期間ノ計算ニ在テハ期間ノ經過スル起初ノ時ハ之ヲ算入ス又日ヲ以テ期間ヲ定メタル時ハ期間ノ經過スル起初ノ日ハ之ヲ算入セス

第百四十六條（六四）　一日ノ期間ハ二十四時ノ期間ニ同シ一个月ハ三十日ヲ以テ計算ス一个年ハ長サヲ法律上ノ曆ニ依テ定マル

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祭日ニ當ル時ハ期間ハ其日丈ケ伸長ス

第百四十七條（六五）　此法律ニ於テ定メタル期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告又ハ被告ノ爲ノ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ陸路八里毎ニ一日ヲ伸長セラル八里以下ノ端數ハ三里ヲ

超ル時ハ之ヲ全數トシテ計算ス又水路ノ四里ハ陸路ノ五里ト同視
ス
裁判所ハ外國ニ於テ住所ヲ有スル原告又ハ被告ノ爲ノニ附加期間
ヲ定ム

第百四十八條 期間ノ經過ハ裁判ノ休暇ニ依テ停止ス其期間ノ殘餘
ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ經過ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ル時ハ期
間ノ經過ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル
前項ノ規定ハ第四百三十條第四百三十一條第四百三十二條第四百四十九條第四百八十
四條第四百九十三條第五百十四條第五百二十九條第五百三十五條
ニ定メタル期間及ヒ休暇事件ニ關スル期間ニハ之ヲ適用セス
不可變期間トハ此法律ニ於テ不可變期間トシテ掲ケタルモノヲ謂ヒ休暇事件トハ帝國裁判所構成法第百四十一條第百四十二條ニ掲ケ
タル事件ヲ謂フ

第百四十九條 期日ノ變更延期及期間懸行ノ期日ヲ定メテ爲

五月四日
謄了

民訴草ノ三三

ス猶間ノ中止及ヒ期間ノ短縮又ハ伸長ハ申立ニ依リテモ又職權ヲ
以テモ顯著ナル理由ニ因リ之ヲ爲ス事ヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除クノ外
之ヲ爲ス事ヲ得
裁判所又ハ伸張スル事ヲ得
第百五十條 期間ノ伸長ニ在テハ新タナル期間ハ前期間滿了ヨリ之ヲ起算ス但各
個ノ場合ニ於テ別段ノ定メナル時ハ此限ニ在ラス
第百五十一條 期間ハ不變期間ヲ除クノ外原告被告ノ合意ヲ以テ之
ヲ短縮又ハ伸張スル事ヲ得
裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申
立ニ因リ顯著ナル理由アル時ハ之ヲ短縮又ハ伸張スル事ヲ得然レ
ト法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸張ハ此法律ニ於テ特ニ定メタル場合
ニアラサレハ之ヲ許サス
期間ノ伸張ニ在テハ新タナル期間ハ前期間滿了ヨリ之ヲ起算ス

伸縮ニ付テノ申請ハ口述辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得

未定

第百五十九條　期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ疏明スル事ヲ要ス其伸縮ハ裁判所書記ニ口述シテ其調書ヲ作ラシムル事ヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾ヲ提出セサル時ハ之ヲ審訊シタル後ニアラサレハ之ヲ許可スル事ヲ得ス又相手方カ異議ヲ述フル時ハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ之ヲ除去スル事ノ特別ナル困難ヲ證シタル時ニアラサレハ之ヲ許可スル事ヲ得ス訴訟代人ノ差支アルカ爲メノ期日ノ再度ノ變更又ハ期日ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニアラサレハ裁判ニ之ヲ許サス

期日ノ變更又ハ期間ノ伸張ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ル事ヲ得ス

五月五日午前ヨリ午後ノ方ヘ改タル

第百五十七條　此節ニ於テ裁判所及ヒ部長ニ與ヘラレタル權利ハ受命判事又ハ受訴判事ノ定ムヘキ期日及ヒ期間ニ付キテハ其判事ニモ亦屬スルモノトス

民事訴訟法新草案

第九回

日本學術振興會

日本學術振興會

第二編　第一審ノ訴訟手續

第一章　地方裁判所ノ訴訟手續

第一節　口頭審問ニ至ルマテノ訴訟手續

第〇一條　訴狀ニハ左ノ諸件ヲ掲ク(ル)事ヲ要ス

第一　原告被告及ヒ裁判所ノ表示

第二　起シタル請求ノ目的物及ヒ其請求ノ理由タル事實ノ定マリタル明示

第三　定マリタル申立

右ノ外準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ訴狀ニモ之(亦)ヲ適用ス

第〇二條　同一ノ被告ニ對スル原告ノ數個ノ請求ハ其總テノ請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且同一種類ノ訴訟手續カ許サレタル時ハ一箇ノ訴ニ併合スル事ヲ得但民法ノ規定ニ反スル時ハ此限ニ在ラス

第〇三條　訴狀カ第〇一條ノ規定ニ適セサル時ハ相當ニ定メラルヘキ期間內ニ其欠缺ヲ補正スヘキ事ヲ命令ヲ以テ命シ又原告カ此命ニ從ハサル時ハ其期間ノ滿了ノ後訴狀ヲ差戻ス事ヲ要ス

其差戻ノ命令ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第〇四條　訴狀カ第〇一條ノ規定ニ適スル時ハ之ヲ被告ニ送達スル事ヲ要ス

爭訟事件ノ權利拘束ハ此送達ニ因テ生ス

第〇五條　權利拘束ハ左ノ効力ヲ有ス

第一　權利拘束ノ繼續中原告又ハ被告カ爭アル請求又ハ其一分ヲ訴又ハ反訴ヲ以テ他所ニ於テ主張スル時ハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ起ス事ヲ得

第二　受訴裁判所ノ管轄ハ爭訟物ノ價額ノ變更、住所ノ變更又ハ其他管轄ヲ定ムル狀況ノ變更ニ因テ動カサレス

第三　原告ハ訴ノ理由ヲ變更スルノ權利ナシ但被告カ變更セラレタル訴ニ付キ本事件ノ口頭辯論ヲ爲ス前其變更ニ對シ異議ヲ述ヘサル時ハ此限ニ在ラス

第〇六條　原告カ訴ノ理由ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲ス時ハ被告ハ異議ヲ述フル事ヲ得ス

第一　事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スル事

第二　訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ制限スル事

第三　最初求メラレタル物カ後ニ滅盡又ハ變更シタルニ因リ其物ニ換ヘテ他ノ物又ハ利益ヲ求ムル事

第〇七條　訴ノ理由ノ變更カ存セストスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ル事ヲ許サス

第〇八條　訴ノ全部又ハ一分ハ權利拘束ノ終ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ又本事件ニ付キ被告ノ第一口頭審問ノ始マルマテニ限リ

被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下クル事ヲ得

訴ノ取下ハ口頭審問ノ際之ヲ述ヘサル時ハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス又訴狀カ既ニ送達セラレタル場合ニ於テハ書面ハ之ヲ被告ニ送達スル事ヲ要ス

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ効力ヲ消滅セシムルノ結果ヲ生ス

訴カ再ヒ爲サレタル時ハ被告ハ前訴訟ノ費用ノ償ヲ受クニ至ルマテ應訴ヲ拒ム事ヲ得

第〇九條　訴狀ノ送達ノ際被告ハ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スヘキ事ヲ命令ヲ以テ催告セラルヽ事ヲ要ス

答辯者ニハ準備書面ニ關スル一般ノ成規ヲ適用ス

第〇十條　訴カ其管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタル時ハ被告ハ原告ニ對シ同一ノ裁判所ニ反訴ヲ起ス事ヲ得

然レ供財產權上ノ請求ニアラサル請求ニ係ル反訴又ハ其目的物ニ付キ專屬管轄カ規定セラレタル反訴ハ若シ其反訴カ訴ナル時ハ裁判所ニ於テ管轄權ヲ有スヘキ場合ニアラサレハ之ヲ爲ス事ヲ許サス

第〇十一條　反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭審問中相手方ノ面前ニ於テ演述ヲ以テ之ヲ起ス事ヲ得

然レ供答辯書ノ差出ノ期間內ニ差出シタル書面ヲ以テ起サヽル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲スヘキ場合ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ナクシテ以前其反訴ヲ起ス能ハサリシ事ヲ證明スル時ニアラサレハ之ヲ爲ス事ヲ許サス

第〇十二條　右ノ外訴ニ關スル此法律ノ成規ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ殊異カ生スル時ハ此限ニ在ラス

第〇十三條　答辯書又ハ反訴カ之カ爲メニ定メラレタル期間内ニ差出サレタル時ハ口頭審問ノ期日ヲ定ム

急ナル事件ニ在テハ裁判長ハ申立ニ因リ即時訴ニ付キ口頭審問ノ期日ヲ定ムル事ヲ得此場合ニ於テハ反訴ハ第一口頭審問ノ終ルマテ之ヲ起ス事ヲ得然レ供其後ハ第〇十一條第二項ニ定メタル條件ニ依ルニアラサレハ之ヲ起ス事ヲ得

第〇十四條　呼出狀ノ送達ト期日トノ間ニ在スヘキ期間ハ少ク供七日トス

第〇十五條　裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第〇條ニ定メタル期間ハ之ヲ相當ニ伸長シ又第〇十四條ニ定メタル期間ハ第〇十三條第二項ノ場合ニ在テハ切迫ナル危險ニ方リ二十四時マテ之ヲ短縮スル事ヲ得

第百四十七條ニ揭ケタル成規ハ此規定ニ因テ動カサルヽ事無シ

第〇十六條　原告被告ノ各方ハ訴狀又ハ答辯書ニ揭ケサリシ事實上ノ主張若クハ立證方法若クハ申立ニシテ之ニ付キ相手方カ豫ノ穿鑿ヲ爲スニアラサレハ陳述ヲ爲ス事能ハスト雖知スルモノヲ口頭審問ノ前遲延ナク通知シテ相手方ヘノ書面ノ送達ヲ爲スノ暇ヲ得セシメ又相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲スノ暇ヲ得セシムル事ヲ要ス

第十一回　楽毒事法愈盛衰
武尊盛愈法事毒楽

第十二回　ストーム楽屋ナ楽ンタ出語ハ国楽作御ク国二十理

本節ハ報告委員ノ提出シタル案ヲ原案トス

第三編　訴訟手續ニ付テノ總規

第一章　口頭訴訟手續及ヒ準備書面

第百三十三條　判決ヲ爲ス裁判所ニ於ケル爭訟ニ付テノ原告被告ノ辯論ハ口頭ナリ但此法律ニ於テ豫メ口頭辯論ヲ爲スヲ要セスシテ裁判ヲ爲ス事ヲ定メタル時ハ此限ニ在ラス

裁判ハ豫メ口頭辯論ヲ爲スヲ要セスシテ之ヲ爲ス時ト雖モ亦合議裁判所ニ於テハ會議局ヨリ之ヲ發ス

訟廷外ニ於ケル訴訟指揮上ノ命令ハ合議裁判所ニ於テハ裁判長又ハ其命ヲ受ケタル判事之ヲ發ス

第百三十四條　口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第百三十五條　書面ニハ左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一、原告被告及ヒ其法律上代人、訴訟代人又ハ辯護士ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ヲ以テスル表示

第二　爭訟物ノ表示
第三　申立ノ事項
第四　附屬書類ノ數
第五　場所、年、月、日
第六　裁判所ノ表示

第百三十六條　各書面ニハ調製者ノ署名及ヒ印ヲ備フル事ヲ要シ其書面數葉アル時ハ契印スル事ヲ要ス若シ調製者署名シ又ハ捺印スル事能ハサル時ハ公ナル職員ノ面前ニ於テ書面ヲ作ル場合ヲ除クノ外代人之ニ署名捺印シ且差支ノ事由ヲ記載スル事ヲ要ス

第二百五條第二項ノ規定ハ原告被告ノ書面ニ之ヲ準用ス

第百三十七條　書面ニ於テ提出スヘキ事實ハ完全ニ其レ供簡明ニ記載スル事ヲ要ス

其他事實上關係ノ說明并ニ法律上ノ討論（同）及ヒ請求ハ書面

四月廿日新用

ニ之ヲ揭クル事ヲ得ス

以上四月廿日讀了

第百三十八條　書面ニハ訴訟ノ資格ニ屬スル證書ト其他總テ原告被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ理由トシテ引用シタルモノトヲ添フル事ヲ要ス

若シ證書ノ一部分ノミヲ要用トスル時ハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印影ヲ載スル拔書ヲ添フルヲ以テ足ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタル時又ハ大部ナル時ハ其證書ヲ明細ニ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

一項ハ新百七條ノ一項ニ入ル

第百三十九條　原告被告ハ其書面ニ附屬書類ヲ添ヘ裁判所ニ於テ之ヲ裁判所書記ノ手ニ渡シ且相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ書面ニ添フル事ヲ要ス

未定

然レ供原告被告ニハ自己ノ危險ヲ以テ郵便ニテ送致スル事ヲ許サ

ル

第百四十條　裁判所書記ハ受領スル各書面ニ其開封ノ際直チニ受領ノ日附及ヒ附屬書類ノ數ヲ記入シ且自己ノ印ヲ捺スル事ヲ要ス

若シ相手方ニ附與スル爲ノ必要ナル謄本ヲ書面ニ添ヘサル時ハ書面ヲ還付ス但求ニ因リ其缺ケタル謄本ヲ後ニ差出シタル時又ハ裁判所書記カ懈怠者ノ費用ヲ以テ之ヲ作ラシノタル時ハ此限ニ在ラス

第百四十一條　第百三十五條以下ノ規定ハ其他口頭辯論ノ準備ニ供セサル申請書、陳述書、屆書又ハ論辯書ニシテ一爭訟ニ於テ原告若クハ被告又ハ原告被告ニアラサル者ヨリ裁判所ニ差出スモノニ亦之ヲ準用ス

第百四十二條　裁判所ハ解シ難キ提出書類ヲ完備スヘシト命シテ還付スルノ權アリ

一項側

二項ハ新百七條ノ二項ニ入ル

側

第百四十三條　此法律ノ成規ニ從ヒ口頭ヲ以テ申請、陳述、屆出又ハ論辯ヲ提出スル事ヲ許サレタル時ハ裁判所書記ハ提出者ノ費用ヲ以テ其謄書ヲ作ル事ヲ要ス

謄書ヲ送達スヘキ時ハ提出者ノ費用ヲ以テ作ルヘキ謄本ハ副本ニ代ル

第百四十四條　口頭辯論ハ裁判長之ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許ス又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スル事ヲ得

裁判長ハ事件カ討論ヲ盡サレ供辯論カ間斷ナク終了セラルヽ事ニ注意ス又必要ノ場合ニ於テハ直チニ辯論繼續ノ期日ヲ定ム

裁判長ハ裁判所ノ見込ニ隨ヒ事件カ討論ヲ盡サレタル時ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決及ヒ決定ヲ言渡ス

第百四十五條　口頭辯論ニ基キ發スル總テノ裁判（判決、決議及ヒ命令）ハ之ヲ言渡ス事ヲ要ス

新百八條ニ移ル

側

第百四十六條　口頭辯論ニ基カスシテ發スル裁判ハ正本ヲ以テ原告被告ニ送達スル事ヲ要ス

第百四十七條　第三者ニ關係ヲ有スル裁判ハ其言渡カ第三者ノ不在ニ於テ爲サレタル時ハ其言渡ヲ爲スノ外ニ第三者ニ正本ヲ以テ送達スル事ヲ要ス

其關係ヲ有スル第三者ハ言渡カ其不在ニ於テ爲サレタル時ト雖モ正本ヲ求ムルノ權アリ

本節ハ報告委員ノ提出シタル案ヲ原案トス

新百九條ニ移ル

新百十條ニ移ル

第二節　口頭辯論

第二百三十一條　口頭辯論ハ原告被告カ其申立ヲ爲ス事ニ因リ始マル

原告被告ノ演述ハ事實及ヒ法律上ノ點ニ於ル總テノ爭訟關係ヲ包括スル事ヲ要ス

口頭演述ニ換ヘテ書面ヲ引用スル事ハ之ヲ許サス文字上ノ趣旨ヲ要用トスル書類又ハ其一部分ニ限リ之ヲ朗讀スル事ヲ得

第二百三十二條　事實ハ眞實ニ基キ完全且明白ニ演述スル事ヲ要ス

原告被告各方ハ全部自認ノ場合ヲ除クノ外相手方ノ主張シタル事實ニ付キ陳述ヲ爲ス事ヲ要ス明カニ爭ハレサル事實ハ原告又ハ被告ノ其他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスルノ意思カ顯レサル時ハ自認シタルモノト看做サル

不知ノ陳述ハ原告又ハ被告ノ自己ノ行爲ニモアラス又其自己ノ實驗シタ

ルモノニモアラサル事實ニ限リ之ヲ許ス其許サレタル場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ハレタルモノト看做ス

新第百十一條ニ移ル

第二百三十三條　裁判長ハ職權上調査スヘキ點ニ關シ相手方ヨリ起サヽル疑ノ存スル時ハ其疑ニ付キ注意ヲ與ス事ヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ解明シ主張シタル事實ノ不充分ナル說明ヲ補充シ證據方法ヲ申出シテ及ヒ總テ事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム

新百十二條ニ移ル

陪席判事ハ裁判長ノ許可ヲ得テ原告又ハ被告ニ問ヲ爲ス事ヲ得

原告被告ハ相手方ニ自ラ問ヲ爲ス事ヲ得

然レ供其問ヲ發スル事ノ申立ヲ裁判長ニ爲ス事ヲ得

若シ其問カ答ヘラレサル時ハ相手方ノ利益ト爲ルヘキ方法ニ答ヘラレタリト看做ス事ヲ得

第二百三十四條　事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ一人ヨリ發シタル問ガ辯論ニ參カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘラレタル時ハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ス

判決ニ至ル手續ノ時ニ移ス

第二百三十五條　口頭辯論ノ前ニ被告ガ左ニ揭ケタル抗辯（妨訴ノ抗辯）中ノ一ヲ提出シ且總テ其證明ヲ要スル時ニ限リ之ヲ疎明シタル時ハ被告ハ本事件ノ辯論ヲ拒ミ且先ツ抗辯ニ付キ辯論及ヒ裁判セラルヘキ事ヲ申立ルノ權アリ

第一　訴訟ヲ許スヘカラサルノ抗辯

第二　裁判所管轄違ノ抗辯

第三　權利拘束ノ抗辯

第四　訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

第五　訴訟費用ノ爲メノ保證欠缺ノ抗辯又ハ爭訟ノ再起ニ付キ前訴訟手續ノ費用ヲ辨償スヘキニ未タ之ヲ辨償セサルノ抗辯

然レ供被告ハ右ニ掲ケタル數箇ノ抗辯ヲ有スル時ハ同時ニ之ヲ提出スル事ヲ要ス

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ニ付テハ特立シテ上訴ヲ以テ不服ヲ申立ル事ヲ得其判決ノ確定マテハ本事件ノ辯論ヲ延引ス然レ供裁判所ハ申立ニ因リ本事件ニ付キ辯論ヲ爲スヘキ事ヲ命スル事ヲ得又裁判所ハ被告ノ方ニ於ケル故意ノ訴訟遲滯ヲ防ク爲メ其意見ヲ以テ其權力ヲ用ユル事ヲ要ス

本事件ノ判決ハ抗辯ニ付テノ判決カ確定ト爲リタル後ニアラサレハ之ヲ發スル事ヲ得ス

以前既ニ本事件ニ付キ準備書面ノ交換カ爲サレタル時ハ更ニ其交換ヲ命セス

第二百三十六條　新ナル攻擊及ヒ防禦ノ方法ハ第二百十九條及ヒ第二百二十七條ノ規定ニ依レル制限ヲ以テ本事件ノ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スル事ヲ得

然レ供裁判所ハ時機ニ後クレテ攻擊及防禦ノ方法ヲ提出シタルニ因リ爭訟ノ完結カ遲延セラレタル時ハ判事ノ心證ニ因リ遲延ノ實アリト爲サレタル勝訴ノ原告又ハ被告ニ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ課スル事ヲ得

其他原告又ハ被告ヨリ時機ニ後クレテ攻擊又ハ防禦ノ方法ヲ提出シタル場合ニ於テ裁判所カ若シ之ヲ許ス時ハ爭訟ヲ遲延スルニ至ルヘク且原告又ハ被告ハ訴訟ヲ遲延セシムルノ故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ更ニ早ク其提出ヲ爲サヽリシノ心證ヲ得タル時ハ申立ニ因リ攻擊又ハ防禦ノ方法ヲ却下スル事ヲ得

第二百三十七條　訴狀又ハ其他ノ準備書面ニ於テ主張セラレサル請求ノ權利拘束ハ其請求カ口頭辯論ニ於テ主張セラレタル時ヲ以テ始マル

同上　第二百三十八條　原告被告ノ各方ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン爲ノニ用ヒントスル證方法ヲ申出テ且相手方ヨリ申出タル證方法ニ付キ陳述スル事ヲ要ス

同上　第二百三十九條　證方法及ヒ證抗辯ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スル事ヲ得

證方法及ヒ證抗辯ノ時機ニ後クレタル提出ニ付テハ第二百三十六條第二項及ヒ第三項ノ規定ヲ準用ス

同上　第二百四十條　原告又ハ被告カ口頭辯論ニ於テ爲スヘキ訴訟行爲ヲ口頭辯論中ニ爲サヽル時ハ其行爲ヲ爲スノ權ヲ失フ失權ハ口頭辯論ノ終結ヲ以テ當然生ス

同上　第二百四十一條　裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ爭訟又ハ或ル爭點ノ解明ヲ試ムルノ權アリ和解ヲ試ムル爲メニハ原告被告ノ自身ノ出頭ヲ命スル事ヲ得

新百十七條ニ移ス　同條ハ裁判所ハ原告又ハ被告ハ徒過シタル期日ノ費用ヲ負擔ス

新第百十八條ニ移ル　第二百四十二條　裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ起サレタル數箇ノ請求又ハ訴及ヒ反訴ニ付キ分離シタル辯論ヲ爲スヲ命スル事ヲ得

新第百十九條ヘ入　第二百四十三條　同一ノ請求ニ關スル數箇ノ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタル時ハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

第二百四十四條　裁判所ハ同一ノ人又ハ異別ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノヲ互ニ併合スヘキ事ヲ命スル事ヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求カ法律上相牽連スル時又ハ元來一箇ノ訴ニ於テ主張セラレ得ヘキ時ニ限ル

新第百廿條ヘ移ル　第二百四十五條　裁判所ハ爭訟ノ裁判ノ全部又ハ一分カ他ノ繫屬スル爭訟ノ目的物ヲ成ス權利關係又ハ行政官廳ノ定ムヘキ權利關係

ノ成立又ハ不成立ニ繫ル時ハ他ノ爭訟ノ完結ニ至ルマテ又ハ行政
官廳ノ裁判アルマテ爭訟ノ審論ヲ延引スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

民事訴訟法新草案　第十二回

新第百廿一條ニ移ス

第二百四十六條　民事爭訟ヲ爲スニ由テ開セラルヘキ行爲ヲ行フタルノ勝訴生スル時ハ刑事訴訟手續ノ終ニ至ルマテ結論ヲ延引スル事ヲ要ス但其開セラルヘキ行爲ノ探知カ爭訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホス時ニ限ル

新第百廿二條ヘ移ス四月廿一日終了

第二百四十七條　裁判所ハ分離、併合又ハ延引ニ關シ發シタル其命ヲ取消ス事ヲ得

第二百四十八條　右ノ命及ヒ其取消ニ對シテハ第二百四十五條及ヒ第二百四十六條ノ場合ニ限リ抗告ヲ爲ス事ヲ得

新第百廿三條ヘ移ス

第二百四十九條　開セラレタル結論ハ裁判所ノ決定ニ依リ更ニ之ヲ開ク事ヲ得

新第百廿六條ヘ移ス

第二百五十條　裁判所ハ適當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告又ハ被告ニ其後ノ演述ヲ禁シ且更ニ新期日ヲ定メテ訴訟代人ヲシテ代理セシムヘキ事ヲ命スル事ヲ得若シ原告又ハ被告カ命ニ從ハサル

日本學術振興會

時ハ申立ニ因リ其任意ニ退キタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フ
事ヲ得

辯護士ニアラサル訴訟代人ニシテ其任ニ適セサル事ノ顯ハルヽ者又ハ他人ノ爲メニ訴訟ヲ爲スヲ業トスル者ハ之ヲ退クル事ヲ得之ヲ退ケタル場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且其期日ニ呼出スノ際斥退ノ決定書ヲ原告又ハ被告ニ送達スル事ヲ要ス

新呼出狀ニハ同時ニ辯護士ニアラサル代人ハ最早許サヽル旨ヲ原告又ハ被告ニ通知スル事ヲ得此條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ル事ヲ得ス

第二百五十一條　原告カ其訴ヘタル請求權ヲ抛棄シ又ハ被告カ敗訴所ニ於テ又ハ書面ヲ以テ其請求ヲ認諾スル時ハ爭訟ハ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス終結ス然レ供相手方ハ抛棄ノ場合ニ於テハ即時ノ却下ヲ又認諾ノ場合ニ於テハ即時ノ判決ヲ申立ル事ヲ得

第二百五十二條　口頭辯論ニ付テハ裁判所書記調書ヲ作ル事ヲ要ス

調書ニハ左ノ諸件ヲ揭クル事ヲ要ス

第一　辯論ノ場所、年、月、日

第二　判事、裁判所書記及ヒ立會フタル檢事屆代表人ノ氏名

第三　爭訟物ノ表示及ヒ原告被告ノ氏名

第四　出頭シタル原告被告、法律上代人、辯護士、訴訟代人及ヒ立會フタル通事ノ氏名若シ原告又ハ被告闕席シタル時ハ其明記

第五　公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタル事

第二百五十三條　辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載スル事ヲ要ス調書ニ記載シテ明確ニスヘキ諸件ハ左ノ如シ

第一　書面ニ揭ケサル申立及ヒ其他裁判ノ爲メ重要ナル申述若シ申立及ヒ申述カ書面ニ揭ケラレタル時ハ其旨ヲ附記スルノミヲ以テ足ル

第二　自認、認諾、抛棄及ヒ和解

第三　證人及ヒ鑑定人ノ供述ノ全部

第四　檢證及ヒ其他ノ檢證ノ結果

第五　調書ニ添附セラレサル裁判（判決、決定及ヒ命令）

第六　裁判ノ言渡

附錄トシテ調書ニ添附セラレ且調書ニ附錄トシテ表示セラレタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第二百五十四條　前條第一項第一號乃至第四號ニ於テ掲ケタル調書ノ部分ハ訟廷ニ於テ之ヲ當事者ニ讀聞カセ又ハ閲覽ノ爲メ之ヲ當事者ニ提示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ爲シタル事及ヒ承諾アリタル事又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記スル事ヲ要ス

第二百五十五條　調書ノ檢認ハ裁判長及ヒ裁判所書記之ヲ爲ス

日本學術振興會

第二百五十六條　受命判事又ハ受託判事カ訟廷ノ内外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問ニ付テノ調書ニ之ヲ準用ス然レ供述調書ニハ出頭シタル當事者カ承諾ノ證徴トシテ署名拇印スル事ヲ要ス若シ當事者署名シ又ハ拇印スル事能ハザル時ハ其旨ヲ調書ニ附記スル事ヲ要ス

第二百五十七條　規定シタル方式ヲ遵守シタルヤ否ハ調書ニ依リテノミ之ヲ證スル事ヲ得

其方式ニ關スル調書ノ旨趣ニ對シテハ僞造ノ證明ノミヲ爲ス事ヲ許ス

日本學術振興會

民事訴訟法草案第八回附錄

第百五十二條　期日又ハ期間ヲ怠リタル原告又ハ被告ハ其償スヘキ訴訟行爲ヲ爲スノ權ヲ失フ但此法律カ其追完ヲ許ス時ハ此限ニ在ラス

懈怠ノ法律上ノ結果ハ當然起發ス但此法律カ失權ヲ爲サシムル事ニ付テノ相手方ノ申立ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

日本學術振興會

第二百十一條　天災又ハ其他避クヘカラサル事變ニ因リ不可變期間ヲ遵守スル事ヲ妨ケラレタル原告又ハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許與ス

原告又ハ被告カ故障ノ期間ヲ懈怠シタル時ハ其過失ニアラスシテ懈怠判決書ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許與ス

第二百十二條　原狀回復ハ二週日ノ期間內ニ之ヲ申立ツル事ヲ要ス期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マリ其期間ハ原告被告ノ合意ニ因リ之ヲ伸フル事ヲ得ス

懈怠シタル不可變期間ノ終ヨリ起算シテ一个年ノ滿了ノ後ハ最早原狀回復ヲ申立ツル事ヲ得ス

第二百十三條　不可變期間ノ懈怠ニ對スル原狀回復ハ遲ク仕期間ノ

日本學術振興會

滿了スル三日前ニ其遵守ノ爲ノ送達スヘキ書類ヲ送達ノ爲ノ執達吏ニ交付シ又ハ裁判所書記ヲ經テ送達ス(ル)事ヲ許シタル場合ニ限リ送達ノ爲ノ裁判所書記ニ交付シタル時ニモ亦其申立ニ因リ原告被告ニ之ヲ許與ス

原狀回復ハ懈怠シタル不可變期間ノ滿了後一个月ノ期間內ニ之ヲ申立ツル事ヲ要ス

第二百十四條　原狀回復ハ書面ノ送達ニ因リ之ヲ申立ツ其書面ニハ左ノ諸件ヲ揭クル事ヲ要ス

第一　原狀回復ノ理由タル事實

第二　原狀回復ノ疎明ノ爲ノノ方法

第三　懈怠シタル訴訟行爲ノ追完又ハ此行爲ヲ既ニ追完シタル時ハ其旨

卽時ノ抗告ノ提出ヲ懈怠シタル時ハ原狀回復ノ申立ハ書面ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス其書面差出ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ發シタル裁判所ニモ又抗告裁判所ニモ之ヲ爲ス事ヲ得

第二百十三條ノ場合ニ於テハ原狀回復ハ懈怠シタル不可變期間ノ滿了後一个月ノ期間內ニ期日ノ爲メニスル呼出狀ヲ送達シタル時ハ口頭辯論ノ爲メ定メタル期日ニ於テ豫メ書面ヲ送達スル事無クシテ亦之ヲ申立ツル事ヲ得

第二百十五條　原狀回復ノ申立ニ付テハ追完シタル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲スノ權アル裁判所之ヲ裁判ス

第二百十六條　原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完シタル訴訟行爲ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レ供裁判所ハ訴訟手續ヲ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ制限スル事ヲ得

申立ノ許否ニ付テノ裁判及ヒ裁判ノ不服申立ニ付テハ追完シタル訴訟行爲ニ付キ此等ノ關係ニ於テ行ハルヽ成規ヲ適用ス然レ供申

立ヲ爲シタル原告又ハ被告ハ故障ヲ爲スノ權ナシ

原狀回復ノ費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサリシモノニ限リ申立人ノ負擔ニ歸ス

第五節　訴訟手續ノ中止及ヒ延引

第二百十七條　原告又ハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テ承繼人カ訴訟手續ヲ引受クルマテ之ヲ中止ス

引受ヲ遲滯シタルトキハ承繼人ヲ引受ノ爲ノ及ヒ同時ニ本事件ノ辯論ノ爲ノ呼出ス事ヲ得

呼出ヲ載スル書面ハ承繼人其者ニ之ヲ送達ス其呼出期間ハ裁判長之ヲ定ム

承繼人期日ニ出頭セサル時ハ申立ニ因リ其主張セラレタル承繼ヲ自認シタルモノト看做シ且裁判所ハ懈怠判決ヲ以テ承繼人カ訴訟手續ヲ引受ケタリト言渡ス又本事件ノ辯論ハ故障期間ノ滿了シタ

ル後始メテ之ヲ爲シ又其期間內ニ故障ヲ申立テタル時ハ其完結ノ後始メテ之ヲ爲ス

第二百十八條　原告又ハ被告ノ財產ニ付キ破產ノ開始シタル場合ニ於テハ訴訟手續ハ破產財團ニ關スル時ハ破產ニ付キ行ハルヽ規定ニ從ヒ之ヲ引受ケ又ハ破產手續ヲ解止スルマテ之ヲ中止ス

第二百十九條　原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代人カ死亡シ又ハ原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ得スシテ其代理權ノ消滅シタル時ハ訴訟手續ハ法律上代人又ハ新法律上代人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ繼續スル意思ヲ其代人ニ通知スルマテ之ヲ中止ス

第二百二十條　原告又ハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ノ中止スル場合ニ於テ遺產ニ付キ保管人カ任設セラレタル時ハ第二百十九條ノ規ヲ適用シ又遺產ニ付キ破產カ開始スル時ハ訴訟手續ノ引受ニ關

スル第二百十八條ノ成規ヲ適用ス

第二百二十一條　辯護士訴訟ニ於テ原告若クハ被告ノ辯護士カ死亡シ又ハ其代理ヲ繼行スルノ能力ヲ失ヒタル時ハ新ニ任設セラレタル辯護士カ其任設ヲ相手方ニ通知スルマテ訴訟手續ヲ中止ス

此通知カ遲滯セラルヽ時ハ原告若クハ被告其者ヲ本事件辯論ノ爲ノ呼出シ又ハ之ニ對シ裁判長ノ定ムヘキ期間内ニ新ナル辯護士ヲ任設スヘキ事ヲ催告スル事ヲ得其催告ニ應セサル時ハ訴訟手續カ引受ケラレタルモノト看做サル又新ナル辯護士ノ任設ヲ後ニ通知スルマテ通知ノ義務アル原告若クハ被告ニ對スル總テノ送達ハ其原告若クハ被告カ受訴裁判所ノ所在地ニモ又受訴裁判所所在地ノ區裁判所管轄内ニモ住居セサル時ニ限リ郵便ニ交付シテ一第百六十一條一之ヲ爲ス事ヲ得

第二百二十二條　戰爭又ハ其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタル時ハ此情況ノ繼續スル間訴訟手續ヲ中止ス

第二百二十三條　法律上代人ノ死亡シ又　訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其欠缺スル場合ニ於テ一第二百十七條、第二百十九條一訴訟代人ニ因リ代理カ爲サレタル時ハ訴訟手續ヲ中止セス然レ供受訴裁判所ハ訴訟代人ノ申立ニ因リ訴訟手續ノ延引ヲ命シ又死亡ノ場合ニ於テハ相手方ノ申立ニ因リ其延引ヲ命ス

訴訟手續ノ延引ノ時間及ヒ其引受ハ第二百十七條、第二百十九條第二百二十條ノ成規ニ從フ又死亡ノ場合ニ於テハ呼出ヲ載スル書面ヲ訴訟代人ニモ送達スル事ヲ要ス

第二百二十四條　原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スル時又ハ官命、戰爭若クハ其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所トノ交通ヲ絶タレタル地ニ在ル時ハ受訴裁判所ハ障碍ノ除去セラルヽマテ亦職權ヲ以テ訴訟手續ノ延引ヲ命スル事ヲ得

日本學術振興會

第二百二十五條　訴訟手續延引ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ裁判所書記ノ面前ニ於テ之ヲ陳述シ其調書ヲ作ラシムル事ヲ得

裁判ハ豫ノ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得

第二百二十六條　訴訟手續ノ中止及ヒ延引ハ各期間ノ經過ヲ止メ及ヒ中止又ハ延引ノ終リタル後更ニ全期間ノ經過ヲ始メシムルノ効力ヲ有ス

中止及ヒ延引中本事件ニ付キ原告又ハ被告ノ爲シタル訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ法律上ノ効力ヲ有セス

口頭辯論ニ基キテ爲スヘキ裁判ノ言渡ハ此辯論ノ終結シタル後ニ始マリタル中止ニ因リ妨ケラルヽ事無シ

第二百二十七條　中止シ又ハ延引シタル訴訟手續ノ引受及ヒ此節ニ記載シタル通知ハ書面ノ送達ニ因テ之ヲ爲ス

第二百二十八條　原告被告ハ訴訟手續ヲ休止スヘキ事ヲ合意スル事ヲ得其合意ハ不可變期間ノ經過ニ影響ヲ及ホサス

口頭辯論ノ爲メノ期日ニ於テ原告被告雙方カ出頭セサル時ハ訴訟手續ハ一方ヨリ新ナル呼出狀ヲ送達セシムルマテ之ヲ休止ス

第二百二十九條　此節ノ成規又ハ其他ノ法律上ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ延引ヲ命スル裁判又ハ之ヲ否ム裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲ス事ヲ得但拒否ノ場合ニ於テハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得

目次

第三節　採證總則
第四節　人證

民事訴訟法新草案　第十三回

日本學術振興會

五月廿六日
未定

同

第三節　採證總則

第二百五十八條　原告被告ノ各方ハ其攻擊又ハ防禦ノ方法ノ基本タル事實ニ關シ舉證ノ義務アリ

原告ハ其起シタル請求ノ發生ニ必要ナル事實ヲ證シ被告ハ其場合ニ於テ請求ノ發生カ妨ケラルヽ事實又ハ請求カ發生シタル限リハ先ツ之ヲ制限シ解止シ若クハ無効トスヘキ事實ヲ證スル事ヲ要ス

又原告被告ノ各方ハ其他ノ攻擊又ハ防禦ノ方法ノ重要ナル基本ヲ成セル事實ヲ證スル事ヲ要ス

第二百五十九條　事實ハ其證スヘキ事實ノ眞僞ヲ推測スルノ起因タル事實ノ提示ニ因リ之ヲ證シ又ハ駁撃スル事ヲ得

第二百六十條　裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限リハ辯論ノ全旨及ヒ或ル探證ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ムヘキヤ否ヲ自由ナル心證ヲ以テ裁判ス

日本學術振興會

未定

第二百六十一條　損害ノ有無及ヒ其數額又ハ賠償スヘキ利益ノ多寡ニ付キ原告被告間ニ於テ爭アル時ハ裁判所ハ總テノ情狀ヲ斟酌シ其意見ヲ以テ之ヲ裁判ス又豫メ其申立テラレタル採證ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定人ニ因レル鑑定ヲ命スヘキヤ否及ヒ如何ナル限度ニ於テ之ヲ命スヘキヤハ裁判所ノ意見ニ任カス

裁判所ハ此章第八節ノ規定ニ依リ職權ヲ以テ原告ヲモ亦證人トシテ訊問スル事ヲ得但他ノ採證カ申立テラレタルト否トヲ問フ事無シ

第二百六十二條　此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張カ疎明セラルヘキ時ハ判事ノ意見ニ關ヒ其主張ヲ眞實ナルヘシト認メシムヘキ舉證方法又ハ舉證理由ヲ以テ足ル

舉證者ハ採證カ即時ニ爲サルヽ事ヲ得ヘキ時ニ限リ之カ爲メ總テノ適法ノ舉證方法ヲ用ユル事ヲ得

日本學術振興會

未定

舉證者ハ其主張ノ眞實ニ付キ證人トシテ訊問ヲ受クル事ヲ許サル事ヲ得

第二百六十三條　原告又ハ被告ノ主張シタル事實ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ證スル事ヲ要セス

第一　其事實カ裁判所ニ在テ顯著ナル時

第二　其事實カ民法又ハ此法律ノ規定ニ從ヒ他ノ確定シタル事實ニ因リ推定セラルヘキ時

第三　其事實カ口頭辯論ノ期日ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ相手方ヨリ自認セラレタル時

第二百六十四條　前條第一號ノ場合ニ於テ事實カ顯著ナリト看做サルヘキヤ否ハ裁判所之ヲ定ム

前條第二號ノ場合ニ於テ推定ニ對シ反證ヲ許スヘキヤ否ハ民法及ヒ此法律ノ成規ニ依ル

五月廿六日終了

制

日本學術振興會

第二百六十五條　裁判所ニ於ケル自認ヲ有効ナラシムルニハ相手方ノ臨席又ハ其認諾ヲ要セス

裁判所ニ於ケル自認ノ効力ハ獨立ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ包含スル主張ヲ之ニ添附スルニ因テ妨ケラルヽ事無シ

裁判所ニ於ケル事實ノ承認カ他ノ附加シ又ハ制限スル主張ニ因テ自認タルノ力ヲ失フヘキヤ否及ヒ之ヲ失フヘキ限度ハ總テノ情況ヲ斟酌シテ之ヲ定ム

第二百六十六條　裁判所ニ於ケル自認ハ自認カ眞實ニ適セサル事及ヒ其事實ニ付テノ錯誤ニ起因シタル事ヲ證スル時ニ限リ之ヲ撤回スル事ヲ得

第二百六十七條　裁判所外ニ於テ又ハ書面又ハ他ノ爭訟ニ於テ爲シタル自認ノ効力ハ判事ノ判定ニ任カス

第二百六十八條　裁判所ハ原告被告ノ申立テタル證據方法外ニ沸リ職權ヲ以テ爭訟關係ヲ審査スルノ權ナシ但左ノ場合ハ此限ニ在ラス

第一　外國ノ現行法又ハ內國ノ各地慣習法、商ひ慣習、各地規約又ハ社團規約ニ關シ裁判所カ其原則ヲ知ラサル時ハ原告被告ノ申立ナシト雖モ必要ナル取調ヲ爲ス事ヲ得

第二　事件ノ關係ヲ他ノ方法ニテ明白ナラシムル事能ハサル時ハ裁判所ハ職權ヲ以テ檢證及ヒ鑑定人ニ因レル鑑定ヲ命シ且原告被告ヲ證人トシテ訊問スル事ヲ得

第二百六十九條　採證ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ通例トス

採證ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一名又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スル事ヲ得

採證ヲ命スル決定ニ對シ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス

第二百七十條　原告被告ノ申立テタル證據ヲ採ルヘキ程度ハ裁判所

之ヲ定ム

原告被告ノ演述ニ次キ直チニ採證ヲ爲サスシテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲スヘキ時ハ採證決定ニ因リ採證ヲ命スル事ヲ要ス

新條

第二百六十三條　採證ニ付時間ノ不定ナル障碍アル時ハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ムル事ヲ要ス若シ此期間ヲ徒過セシメタル時ハ訴訟手續ヲ遲滯セシメサル時ニ限リ其舉證方法ヲ用フル事ヲ得

第二百七十四條　採證決定ニハ左ノ諸件ヲ具備ス

第一　舉證方法ヲ援喝シタル原告若クハ被告ノ氏名

第二　證スヘキ係爭事實ノ表示

第三　舉證方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問スヘキ時ハ其氏名、身分、職業及ヒ住所

第二百七十五條　採證決定ノ變更ハ其決定ノ字句前ニ於テハ原告又ハ被告ヨリ以前ノ證據ニ基キ之ヲ

採證決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス

採證決定ノ執行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

新條

第二百六十六條　採證カ受訴裁判所ノ部員ニ因リ爲サルヘキ時ハ採證決定ヲ言渡ス際裁判長受命判事ヲ指名シ且採證ノ期日ヲ定ム若シ期日ヲ定メサル時ハ受命判事之ヲ定ム」受命判事其命ヲ終行スルニ差支ヘアル時ハ裁判長ハ他ノ部員ヲ命ス

第二百六十七條　採證カ他ノ裁判所ニ於テ爲サルヘキ時ハ裁判長ハ其職記書ヲ發スヘシ

採證ニ關スル審問書ハ原本ニテ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ヘ之ヲ發致シ裁判所書記ハ其受領シタル事ヲ原告被告ニ通知スル事ヲ要ス

第二百七十六條　受命判事又ハ受託判事ハ前ニ於ル採證ハ公ニ之

二百六十七條ヘ移ル

ヲ爲サヌ

採證ノ期日ハ原告被告ニ之ヲ通知スル事ヲ要ス（チ定ノタル時ハ之ヲ）原告被告ノ一方又ハ雙方カ出頭セサル供事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ採證ヲ爲ス事ヲ要ス

第二百七十四條　受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於ル採證ニ際シ異議（生シ其爭ノ）カ申立ヲ（ルニアラサレハ採證ヲ檢行スル事ヲ得ス日）レ其判事之ヲ宗結スルメ機ナキ時ハ此異議ニ付テメ裁判ハ受訴裁判所ニ之ヲ付カヌ然レ仆採證カ異議ニ付テメ裁判ニ（其判事之ヲ裁判スル權ナキ時ハ其宗結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス）擧ラサル限リハ之ヲ續行ヌ

○第二百七十五條　採證ニ關スル審問書ハ原本ニテ受命判事又ハ受託判事ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ交付シ又ハ送致ス其受領ニ付テハ原告被告ニ之ヲ通知スル事ヲ要ス

第二百七十六條　外國ニ於テ爲スヘキ採證ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐劄ノ帝國本判ノ公使若クハ領事ニ嘱託シテ之ヲ爲ス其必要ナル嘱（嘱託書ニ付テハ）

二百六十三條ヘ移ル

託書ニハ第百七十六條第百七十七條及ヒ第百七十九條ノ規定ヲ準用ス

○第二百七十七條　採證ニ對シ不定時間ノ障碍アル時ハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ムル事ヲ要ス若シ此期間ヲ徒過セシメタル時ハ訴訟手續ヲ遲滯セシノサル時ニ限リ證方法ヲ用ユル事ヲ得

第二百七十八條　原告被告ハ採證ノ結果ニ付キ受訴裁判所ニ於テ口頭辯論ヲ爲ス

受訴裁判所ニ於テ採證ヲ爲シタル時ハ採證ニ次キ直チニ此辯論ヲ爲ス但裁判所カ新期日ノ指定ヲ相當トシタル時ハ此限ニ在ラス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ採證ヲ爲シタル時ハ採證ニ關スル審問書ノ受領後口頭辯論ノ爲メ新期日ヲ定ム

第二百七十九條　原告又ハ被告カ採證ノ結果ニ付テノ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル時ハ申立ニ因リ從前ノ辯論ノ旨趣ニ從ヒ且出頭シ

日本學術振興會

タル原告又ハ被告ノ演述ヲ酌シテ裁判ヲ爲ス

此場合ニ於テ出頭シタル原告又ハ被告カ新ナル申述ヲ提出シタル時ハ出頭セサル原告又ハ被告ニ對シテハ稿ホ出頭シテ辯論シタル原告又ハ被告カ相手方ノ申述ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ拒ミタル時ノゴトクニ之ヲ取扱フ

原告被告雙方カ出頭セサルトキハ第四百二條ノ規定ヲ準用ス

二百十四條ニ移ル

第二百八十條　裁判所ハ裁判ヲ爲スニ際シ採證決定ノ旨趣ニ因テ顯

東セラルヽ事無シ

新

第二百七十條　受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ因リ採證ヲ爲ス事ヲ適當トスル理由ノ生シタル時ハ其裁判所ニ採證ヲ囑託スルノ權ヲ有ス此命令ハ原告被告ヘ通知スヘシ

新

第二百七十二條　原告被告ノ一方又ハ双方カ採證ノ期日ニ出頭セサル時ハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ採證ヲ爲ス事ヲ要ス

第二百七十三條　裁判所ハ事件カ未タ判決ヲ爲スニ熟セサル時ハ採證ノ補充ヲ決定スル事ヲ得

原告又ハ被告ノ出頭セサルニ因リ全部又ハ一分ノ採證ヲ爲ス事ヲ得サル場合ニ於テ其遺完又ハ補充ハ之カ爲メ訴訟手續カ遲滯セラレサル時又ハ證人カ其過怠ニアラスシテ前期日ニ出頭シ能ハサリシ事ヲ疎明スル時ニ限リ申立ニ因リ之ヲ許ス

新

第二百七十四條　採證又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムルノ必要アル時ハ證人又ハ原告被告双方カ前期日ニ出頭セサリシ時ハト雖世

日本學術振興會

日本學術振興會

六月一日調了

第二百七十五條　受訴裁判所ニ於テ採證ヲ爲ス時ハ其採證期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スルノ期日ナリトス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ採證ヲ爲スヘキ事ヲ命シタル時ハ其採證決定中ニ同時ニ受訴裁判所ニ於ケル口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムル事ヲ得若シ之ヲ定メサル時ハ採證ノ終結シタル後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ原告被告ニ通知スヘシ

第二百七十六條　裁判所ハ相當ノ期間ヲ定メ採證ノ費用ヲ原告又ハ被告ノ各方ヨリ豫納セシムヘシ

（期間内ニ豫納セサル時ハ採證ヲ爲サル事ヲ得若シ其期間ノ滿了後ト雖モ採證ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限リ之ヲ爲サス）

此命ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得若シ此命ニ從ハサル時ハ採證ヲ爲サス

第四節　人證

第二百七十七條　何人ニテモ法律ニ別段ノ成規ナキ限リハ民事爭訟ニ付キ裁判所ニ於テ證據ヲ流フルノ義務アリ

第二百七十八條　公ノ吏員ハ職務上秘スヘキ事實ニ關スル情況ニ付テハ其本屬廳又ハ其最後ノ本屬廳ノ許可ヲ得タル時ニ限リ之ヲ證人トシテ訊問スル事ヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ル事ヲ要ス

其許可ハ證據ヲ流フルニ因リ國家ノ安寧ヲ害スルノ恐アル時ニ限リ之ヲ拒ム事ヲ得

受訴裁判所ハ其許可ヲ受ケ且之ヲ證人ニ通知スヘシ

第二百七十九條　原告又ハ被告ノ各方ハ其主張ヲ證スル爲ノ用キントスル證人ノ氏名身分、職業及ヒ住所ヲ申立ツル事ヲ要ス

（裁判所ハ採證決定ノ旨趣ニ依リ證人ヲ呼出ヲ命ス）

第二百八十條　證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一　證人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所（原告被告ヲ表示）

第二　原告被告ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ノ表示

第三　採證決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲スヘキ事實

第四 證人ノ出頭スヘキ期日ニシテ場所、年、月、日及ヒ時ヲ以テ表示セラレタルモノ

第五 出頭セサル時法律ニ依リ處スヘキ罰則ノ警示

第六 裁判所ノ名稱

呼出狀ノ送達ト期日トノ間ニ少ナク供三日ノ時間アル事ヲ要ス

第二百八十六條 海陸軍ノ軍隊ニ在ル下士官及ヒ兵卒ノ呼出ハ其直近上官ノ指令官(司)ノ長官ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官ハ期日ヲ遵守セシムルカ爲ノ證人ノ關勸ヲ(スヘシ若シ)許シ又ハ軍務上之ヲ許ス事能ハサル時ハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムルノ囑託ヲ爲スノ義務アリ

第二百八十七條 適式ニ呼出サレタル證人ニシテ充分ナル理由ナクシテ出頭セサルモノニ對シテハ其出頭セサルニ因リ生シタル費用ヲ賠償スルノ義務ヲ負ハシノ及ヒ二十圓以下ノ過料(罰金)ヲ言渡ス

ノ決定(ヘシ)ヲ爲ス

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ過料(罰金)ヲ言渡シ又ハ其引致(勾)ヲ命スル事ヲ得

右(本條)ノ決定ニ對シ證人ハ抗告(此)ヲ爲スノ權アリ抗告ハ執行猶豫ノ効力ヲ有ス

海陸軍ノ(現役)ニ屬スル軍人軍屬ニ對スル過料(罰金)ノ言渡及ヒ其執行ハ其軍人軍屬ノ等級如何ヲ問ハス軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス軍人軍屬ノ引致(勾)ニ付テモ亦同シ

其

議案トナル
民事訴訟法草案
第十四回

日本學術振興會

第十節　判決

第二百七十二條　本事件又ハ豫メ特別ニ完結スヘキ爭點カ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ノ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲ノ互ニ併合セラレタル數箇ノ訴訟ノ中ニテ其一箇又ハ一箇ノミカ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ亦前項ニ同シ

第二百七十三條　同一ノ訴ニ於テ起サレタル數箇ノ請求ノ中ニテ其一箇又ハ一箇ノ請求ノ一分ノミ又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノ一箇ノミカ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ其裁判ヲ爲スニ熟シタル請求ニ付キ以テ裁判ヲ爲ス爲判決ヲ發ス

然レ供裁判所ハ事件ノ程度ニ隨ヒ一分ノ判決ヲ相當ナリトセサル時ハ其發下ヲ爲サヽル事ヲ得

一分ノ判決其モノニ對シテハ特ニ上訴ヲ以テ不服ヲ申立ツル事ヲ得

第三百七十三條　前條ノ規定ハ左ノ場合ニ之ヲ準用ス

日本學術振興會

第一　請求ノ一分ノミ又反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ訴若クハ反訴ノミカ裁判ヲ爲スニ熟スル時

第二　被告カ訴ニ於テ主張シタル請求ト法律上相牽連セサル反對請求ヲ相殺ノ爲メ主張シ訴ノ請求ノミ裁判ヲ爲スニ熟スル時

第二百廿四條　各個ノ獨立ナル攻擊若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ爭カ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ中間判決ヲ以テ裁判スル事ヲ得

第二百七十四條　損害賠償ノ訴其通報機ノ訴又ハ之ニ類スル場合ニ於テ請求ノ理由及ヒ數額カ爭ハレタル時ハ裁判所ハ先ツ其理由ニ付キ裁判ヲ爲ス事ヲ得

請求ノ理由ヲ相當ナリト宣言スル判決基キ之ニ對シテハ特ニ上訴ヲ以テ不服ヲ申立ツル事ヲ得其判決確定ニ至ルマテハ其他ノ手續ヲ中止ス然レ供裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

前項末文ノ場合ニ於テハ第二百三十五條第四項及ヒ第五項ノ規定ヲ準用ス

第二百廿六條　原告又ハ被告カ口頭辯論ノ際其訴ヘタル請求標ヲ拋棄シ又ハ其一方ノ請求ヲ認諾スル時ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲スヘシ

第二百七十五條　判決ハ辯論セラレタル總テノ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ包括スル事ヲ要ス

然レ供數個ノ獨立ナル攻擊又ハ防禦ノ方法カ主張セラレ其中ノ一個ヲ功効アリトスル時ハ裁判所ハ其他ノモノヲ判定スルノ義務ナシ

第三百七十六條　裁判言渡ハ原告ノ起シタル訴ヲ却下スヘキ事又ハ訴ノ申立ニ因リ被告ノ敗訴ヲ判決スル事ノミヲ以テ足レリトセス其却下ノ場合ニ於テハ却下セラレタル請求ヲ又判決言渡ノ場合ニ

五月十八日繼了

例

於テハ被告ノ責ニ歸スヘキ給付、行爲、實假又ハ不行爲ヲ判決式文ニ明確ニ表示スル事ヲ要ス

第三百七十七條　請求ヲ起ス事早キニ過キタルノ故ノミヲ以テ其請求カ正當ナラストセラレタル時ハ現時ノ却下ノミヲ判決式文ニ於テ言渡ス事ヲ要ス

第三百七十八條　裁判所ハ原告又ハ被告ニ對シ其申立テサル物ヲ原告又ハ被告ノ有ニ歸セシムルノ權ナシ

付キ裁判スルノ權ナシ

裁判所ハ訴訟費用ノ負擔ニ關スル義務ニ限リ申立アラサルモ判決終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ

スル事ヲ要ス然レ供裁判所ハ一分ノ判決ヲ爲ス場合ニ於テ費用ノ點ニ付テノ裁判ヲ後日ノ判決マテ留保スル事ヲ得

第三百七十九條　判決ノ發下ニ付テハ其判決ノ發下ニ先チタル最終ノ口頭辯論ニ臨席シタル判事ノミ參與スル事ヲ得

第三百八十條　判決ノ言渡ハ口頭辯論ノ終リタル期日ニ於テ之ヲ爲ス但此期日ハ七日シ又ハ直チニ指定セラルヘキ期日ニ於テ之ヲ爲ス但此期日ハ七日ヲ過クル事ヲ得ス

第三百八十一條　判決ハ判決式文ノ朗讀ニ因リ之ヲ言渡ス

懈怠判決ハ其式文ヲ作ラサル以前ト雖モ之ヲ言渡ス事ヲ得

同時ニ裁判理由ノ重要ナル旨趣ヲ言渡ス事ヲ至當ト認ムル時ハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ其要領ヲ口告ス

第三百八十二條　判決言渡ノ効力ハ原告被告又ハ其一方ノ在廷スルト否トヲ問ハス其言渡サレタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ其他ノ方法ニ於テ判決ヲ使用スル原告又ハ被告ノ權ハ此法律ニ特ニ定メタル場合ヲ除クノ外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ關係セス

第三百八十三條　判決ノ調製ハ裁判長又ハ其指定シタル判事ノ任ト書

判決ニハ左ノ諸件ヲ包含ス

第一　原告被告及ヒ其法律上代人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ノ

表示

第二　争訟ノ事實關係及ヒ權利關係ノ簡略ナル記載ニシテ提出セラレタル申立ヲ掲ケタルモノ（ヒノ部分ノ標示）
但原告被告ノ口頭陳述ニ基キ且提出シタル申立ヲ表シタル其ノ事實及ヒ爭ヒ

第三　裁判ノ理由

第四　裁判其モノ（判決式文）

第五　裁判所ノ名稱裁判ニ參與シタル判事ノ（官）氏名并ニ其官名及ヒ立會ヒタル裁判所書記ノ氏名并ニ其官名

檢事カ辯論ニ參與シタル時ハ其旨ヲ判決書ニ附記ス

第二百八十四條（三）　判決書ノ原本ニハ裁判ニ參與シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アル時ハ其理由ヲ明示シテ裁判長其旨ヲ判決書ニ附記シ裁判長差支アル時ハ（官等是モ高キ）先任ノ陪席判事之ヲ附記ス

判決書ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付スル事ヲ要ス

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本ヲ領收シタル日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印スル事ヲ要ス

第二百八十五條（三）　原告被告ノ各方ハ判決書ノ送達ヲ申立ツル（事ヲ得）ノ權アリ其申立カ爲サレタル時ハ判決書ノ正本ヲ申立人及ヒ相手方ニ送達スル事ヲ要ス（可シ）

第二百八十六條（三）　判決ヲ未タ言渡サス及ヒ未タ之ニ署名捺印セサル間ハ（裁判所書記ハ）其正本、抜書及ヒ謄本ヲ付與スル事ヲ得ス

裁判所書記ハ右ノ正本、抜書及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證スル事ヲ要ス

第二百八十七條（三）　裁判所ハ其言渡シタル判決（參局及ヒ中間判決中ニ包含セラレタル裁判ニ關シテ爭訟ノ全部又ハ一分ヲ完結スルモノヽ中ニ包含セラレタル裁判ニ關シ）

裁判所ハ判決ヲ廢棄スル事ヲ得ス又裁判所ハ下ノ三个條ノ規定ヲ

留保シ判決ニ追加ヲ爲シ又ハ其他ノ變更ヲ爲ス事ヲ得ス

第二百八十八條（二三）　裁判所ハ判決書中ニ於ケル違算、書損及ヒ之ニ類スル著シキ誤謬ヲ何時ニテモ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更正スル事ヲ要ス

二項

更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ裁判スル事ヲ得

三項

更正ニ付テノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得

第二百八十九條（二三）　主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ一分ヲ裁判ニ際シ脫漏シタル時ハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充スル事ヲ要ス

追加裁判ノ申立カ判決ノ言渡後直チニ爲サレサル時ハ遲ク供判決

未定

五月十九日
終了

書ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲ス事ヲ要ス

其申立ニ付テハ直チニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲ス事ヲ要ス其辯論ハ爭訟ノ完結セラレサル部分ニ限リ之ヲ爲ス以テ目的トス

又其申立ニ付テハ期日ニ原告被告ノ雙方カ出頭セスト雖モ裁判ヲ爲ス事ヲ要ス出頭セサル原告又ハ被告ハ故障ヲ申立ツルノ權ナシ

第二百九十條（二四）　判決ヲ更正シ又ハ之ヲ補充スル裁判ハ判決其モノヽ或分ニシテ之ヲ原本及ヒ正本ニ加フル事ヲ要ス（若シ正本ニ之ヲ加フル事ヲ得サル時ハ更正又ハ補充ノ物判ノ正本ヲ作ル事ヲ要ス）

第二百九十一條（二四）　判決式文ニ包含セラレタル裁判其モノニ限リ確定ノモノト爲ル事ヲ得其理由ハ確定ノモノト爲ル事ヲ得ス

第二百九十二條（二四）　口頭辯論ニ基キ決定ヲ發スル時ハ第二百七十九條、第二百三十條第二百三十一條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ又第二百三十二條第二百三十六條第二百八十條、第二百八十六條ノ期定ヲ準用及ヒ第二百三十七條ノ期定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長并ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

冒渡サヽル裁判所ノ決定及ヒ冒渡サヽル裁判長并ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ聯編ヲ以テ原告被告ニ之ヲ發達スル事ヲ要ス

第二百四十五條 豫ノ口頭辯論ヲ經スシテ爲ス裁判ニハ第三百八十六條及ヒ第三百八十七條ノ規定ヲ準用ス

第十一節 闕席判決

第二百九十四條 口頭辯論ノ期日ニ原告又ハ被告カ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル相手方カ闕席判決ヲ申立ツル時ハ此判決ヲ爲ス

第二百九十五條 出頭セサル一方カ原告ナル時ハ裁判所ハ其請求ヲ拋棄シタルモノト看做シ其訴ヲ却下スル事ヲ闕席判決ヲ以テ冒渡ス事ヲ要ス

第二百九十六條 出頭セサル一方カ被告ナル時ハ裁判所ハ被告ヨリ書面ヲ差出シタルト否トヲ問ハヌ被告カ原告ノ事實上ノ口頭陳述ヲ自認シタルモノト看做ス

前項ノ理由ニ基キ若シ原告ノ請求ヲ正本ト爲スニ足ル時ハ闕席判決ヲ以テ被告ノ訴ヲ冒渡シ又然ラサル時ハ原告ノ訴ノ却下ヲ冒渡ス事ヲ要ス

（併流ニ因リ堪ヒカ其起シタル）（請求ヲ正當ト認サ）

第二百九十七條 反訴ノ場合ニ於テハ反訴原告トシテ出頭セサル被告ニ對シ第二百九十五條ノ規定ヲ準用シ又反訴被告トシテ出頭セサル原告ニ對シテハ第二百九十六條ノ規定ヲ準用ス

（一五月廿六日削ル）

第二百九十六條 延期セラレタル口頭辯論ノ期日又ハ爲證決定ヲ發スル前若クハ後ニ於テ口頭辯論續行ノ爲メニ定ムル期日モ亦第二百四十二條ノ辯論期日ト看做ス

第二百九十八條 原告又ハ被告ニシテ出頭スルモ辯論ヲ爲サヽルモノ又ハ其陳述ヲ爲サヽル前ニ第百五十三條又ハ第二百五十條ノ規定ニ依リ任意ニ退席シタル時ノ如タニ取扱ハルヘキモノハ亦出頭セサルモノト看做スサル

第二百四十八条　原告又ハ被告カ辯論ヲ爲シタル時ハ各箇ノ事實、證書又ハ其發セラレタル間ニ付キ陳述ヲ爲サスト雖モ此節ノ規定ヲ適用セス

第二百四十九条　左ノ場合ニ於テハ缺席判決ヲ爲スノ申立ヲ却下シ又ハ出頭セサルシタル原告又ハ被告ハ再ヒ呼出シテ口頭辯論ノ新期日ヲ定ムル事ヲ要ス但其却下ニ對シ被告ヲ爲ス事ヲ許サス

第一　出頭セサルシタル原告又ハ被告カ適式ニ呼出サレサリシ時（裁判所ノ職權上考察スヘキ情況ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス事能ハサル時）

第二　出頭セサル原告又ハ被告カ天災若クハ其他避クヘカラサル事變ニ因リ其出頭ヲ妨ケラレタル事ヲ眞實ト認メシムヘキ情況カ知レタル時

第三　口頭ヲ以テ爲シタル出頭シタル原告又ハ被告カ缺席ノ爲メ重要ナル事實上ノ申立ヲ爲シ又ハ其既ニ差出シタル出頭セサル原告若クハ被告ニ適當ナル時ニ送達シタル書面ニ包含セラレサル申立ヲ提出シタル時

辯論カ延期セラレタル時ハ出頭セサル原告又ハ被告ヲ新期日ニ呼出スヘシ

右第三號ノ場合ニ於テハ出頭セサル原告又ハ被告カ新揭出ヲ載スル書面ノ謄本ヨリ期日マテニ必要ノ期間ヲ有スル樣定メタル新期日ニ之ヲ呼出ス事ヲ要ス

第二百八十八(三)條　證人ノ出頭(不參)セサリシ事カ後ニ於テ(充分)其證明セラレタル理由ヲ以テ充分ニ辨解セラレタル時ハ(罰金及ヒ賠償ノ決定)裁判ノ宣渡ヲ廢止スル事ヲ要ス

證人ノ屆出(不參屆)及ヒ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得

第二百八十九(四)條　皇族及ヒ(證人ナル時ハ)任官ハ其所在ニ就キ受命判事又ハ受託判事(其所在ニ就キ)之ヲ訊問ス

「各大臣ハ其官廳所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滯在スル時ハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス」

「帝國議會ノ議員其開會期間議會所在地ニ滯在中ハ其地ニ於テ之ヲ訊問ス」

第二百九十(八五)條　左ノ(ニ掲クル)者ハ證據ヲ述フルヲ拒ム事ヲ得

第一　刑法第百十四條及ヒ第百十五條ノ(規定ニ適スル)意義ニ於ケル原告又ハ被告ノ親屬

第二　原告又ハ被告ニ後見セラルヽ者

第三　尊卑属又ハ卑属トシテ原告又ハ被告ニ付ヘ見定ト同居スル者

又ハ証人トシテ之ニ仕フル者

「被判長ハ前項ノ者ニ對シ其訊問前證據ヲ述フルヲ拒ムノ權利ヲ有スル事ヲ告クヘシ」

第二百九十八条六　左ノ條件ニ付テハ證據ヲ述フルヲ拒ム事ヲ得ヘキ證件左ノ如シ

第一　官吏又ハ官吏タリシ者ハ其職務上默秘スルノ義務アル情況ニ付キ

第二　醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人及ヒ藥劑職カ其役員、自分又ハ職業ノ爲ノ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ其默秘スヘキモノニ付キ

第三　問ノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル其親屬ノ恥辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招クノ恐アル時ハ其問ニ付キ

第四　問ノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル其親屬ニ對シ直接ニ財產權上ノ損害ヲ生セシムヘキ時ハ其問ニ付キ

第五　證人カ技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニアラサレハ答辯スル事能ハサル問ニ付キ

第二百九十七条八　證人ハ左ノ事項ニ付テハ第二百九十七条八第一號及ヒ第二百九十六条八第四號ノ規定ヲ適用セスシテ證人ハ證據ヲ述フルヲ拒ム事ヲ得ス

第一　家族ノ中ノ者ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二　家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ關スル事實

第三　權利行爲ヲ成スノ際親屬カ證人トシテ立會フタル時其成立及ヒ旨趣

第四　親屬自身カ原告又ハ被告ノ前主又ハ其代人トシテ爲シタル行爲ニシテ爭アル權利關係ニ關スルモノ

「新條第一號第二號ニ掲ケタル者ハ其發効スヘキ發令ヲ待セラレタル時ハ證據ヲ述フルヲ拒ム事ヲ得ス」

第二百八十八條　證據ヲ述フルヲ拒ミタル證人ハ其訊問ノ爲メ定メラレタル期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又期日ニ至テハ其拒絶ノ理由タル事實ヲ明示シ且之ヲ證明スル事ヲ要ス

證人カ其拒絶ヲ書面又ハ口頭ニテ陳述シ且其理由ヲ證明シタル時ハ期日ニ出頭スルノ義務ナシ

裁判所書記ハ拒絶ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作シタル時ハ之ヲ原告被告ニ通知スヘシ

第二百八十九條　拒絶ノ當否證據ヲ述フルヲ拒ム事ニ付テハ受訴裁判所ノ認定ニ於テ原告被告ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ裁判ヲ爲ス但第二百八十六條第一號ノ場合ニ於テハ證人カ拒絶ノ爲メ主張シタル理由ノ正當ナル事ヲ宣誓ヲ以テ疎定スルヲ命スル事ヲ得

原告又ハ被告カ出頭セサル時ハ決定ハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シ事件ノ程度ニ隨ヒ決定ヲ爲ス之ヲ發ス

擧證者及ヒ證人ハ決定ニ對シ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲スヲ得其抗告ハ執行停止ノ効力ヲ有ス

第二百九十五條　證據ヲ述フル事ヲ拒ミ又ハ其申立テタル理由カ確定ニ棄却セラレタル後ニ拒ミタル時ハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絶ニ因テ生シタル費用賠償ノ義務及ヒ四十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

證人ハ費用賠償ノ義務及ヒ過料ノ言渡ニ對シ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲スヲ得其抗告ハ執行停止ノ効力ヲ有ス

軍人軍屬ニ對スル過料ノ言渡及ヒ執行ハ其軍人軍屬人編編部何ヲ問ハス軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第二百九十一條　原告又ハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人ト第二百八

六月二日
終了

十五條第一號乃至第三號ノ關係アル時ハ其證人ヲ已ニスル事ヲ得

第二百九十二條　忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲スヘシ此時限後ハ其前ニ忌避ノ理由ヲ主張スル事ヲ得ヘカラサリシ事ヲ疎明スルニアラサレハ忌避スル事ヲ得ス

忌避ノ申請ハ書物ヲ以テ又ハ參判所書記ニ口述シ其顛末ヲ作ラシテ之ヲ爲ス事ヲ得

忌避ヲ〻ノ理由ハ之ヲ疎明スヘシ

第二百九十六條　充分ナル理由ナクシテ出頭セサル證人又ハ其理由ヲ明示セスシテ證據ヲ述フル事ヲ拒ミ又ハ其申立テタル理由カ確定ニ棄却セラレタル後ニ拒ミタル證人ニ對シ衆證者ハ特別ノ訴ヲ以テ之カ爲メ生シタル損害ノ賠償ヲ請求スル事ヲ得此場合ニ於テハ反對ノ證明アルマテハ證人ノ證スヘキ事實ハ證人之ヲ陳シ得ヘキモノト看做サル

第二百九十三條　忌避ノ申請ニ付テノ參判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得

忌避ヲ理由アリト認ス決定ニ對シテハ上訴ヲ爲ス事ヲ得ス忌避ヲ理由ナシト認ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス事ヲ得

第二百九十七條　各證人ハ其携帶スヘキ呼出狀又ハ其他適當ノ方法ヲ以テ其人違ナラサル事ヲ判然ナラシメタル後其訊問前ニ宣誓ス（各別）ル事ヲ要ス

然レ供宣誓ハ特別ノ理由アル時殊ニ其許否ニ付キ疑義ノ存スル時ハ訊問ノ終ルマテ之ヲ中止（延ハ）スル事ヲ得

第二百九十五條　證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ附加セサル事ノ誓ヲ爲ス事ヲ要ス

第二百九十八條　證人ハ訊問セラルヽ前愛憎畏懼ノ心ナクシテ眞實ヲ隱ナク述ヘ眞實ノ外何事ヲモ附加セサル事ノ誓ヲ爲ス事ヲ要ス

又證人ハ訊問ノ後ニ宣誓ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサリシ事ノ誓ヲ爲ス事ヲ要ス

日本學術振興會

第二百九十六條　宣誓ヲ爲ス前宣誓者ニ對シ偽證ノ罰ヲ適當ナル方法ニテ警示スル事ヲ得

第二百九十七條　證人タルヲ宣誓ヲ拒ミタル者ニ對シテハ第二百八十五條乃至第二百九十五條ノ成規ニ從ヒ其取調ヲ爲ス

第二百九十八條　左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメサレ供述者ノ爲メ之ヲ訊問スル事ヲ得

第一　訊問ノ時未タ滿十六歲ニ至ラサル者

第二　必要ナル精神上ノ發達ヲ缺ケル者

第三　刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ永久又ハ一時喪失シタル者

第四　第二百八十五條及ヒ第二百八十六條ノ第三號幷ニ第四號ノ規定ニ依リ證據ヲ述フル事ヲ拒絶スルノ權アル人ニシテ其權利ヲ行用セサルモノ但第二百八十六條第三號幷ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絶ノ權利ニ關スル專管ニ付申

第五　爭訟ノ成否ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者ヲ除テテラレタル時ニ限ル

第二百九十九條　證人ハ後ニ審訊セラルヘキ證人ノ在ラサル處ニ於テ各別ニ之ヲ訊問ス

證人ニシテ其供述互ニ齟齬スル時ハ之ヲ對質セシムル事ヲ得

民事訴訟法講案　第十五回

東京帝國大學教授　正木亨

第二百五十條　闕席裁判ヲ爲スノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得其決定カ取消サレタル時ハ出頭セサリシ原告又ハ被告ヲ新期日ニ呼出ス事ヲ要セス　可カラス

第二百五十一條　裁判所ハ左ノ場合ニ於テ闕席判決ヲ爲スノ申立ニ付テノ辯論ヲ職權ヲ以テ延期スル事ヲ得

第一　出頭セサル原告又ハ被告カ適式ニ呼出サレサリシ時

第二　出頭セサル原告又ハ被告カ天災若クハ其他避クヘカラサル事變ニ因リ其出頭ヲ妨ラレタル事ヲ眞實ト認メラレムヘキ情況ナリシタル時

出頭セサリシ原告又ハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出スヘシ　アル時

第四百一條　前數條ノ規定ハ左ノ場合ニ之ヲ準用ス

第一　原告又ハ被告カ口頭辯論ノ延期セラレタル期日又ハ口頭辯論ノ續行ノ爲メノ定メラレタル期日ニ出頭セサル時

第二　妨斷ノ抗辯ニ付キ別ニ爲シタル辯論ノ終了シタル場合ニ於

日本學術振興會

テ原告又ハ被告カ本事件ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ定メラレタル期日ニ出頭セサル時

第三　請求ノ基本ニ付キ豫ノ裁判ヲ爲シタル場合ニ於テ原告又ハ被告カ數額ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ定メラレタル期日ニ出頭セサル時

出頭セサル原告又ハ被告カ前ニ爲シタル申述ハ闕席判決ヲ發スルニ際シ之ヲ斟酌セス右第一號ノ規定ハ第二百四十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ依リ分離シテ辯論ヲ爲シ且其辯論終了シタル場合ニハ之ヲ適用ス

第四百二條　口頭辯論ノ期日ニ原告被告ノ雙方カ出頭セサル時ハ原告又ハ被告ヨリ口頭辯論ノ新期日ノ指定ヲ申立ツルマテ訴訟手續ヲ休止ス

其申立カ一个年ノ期間内ニ爲サレサル時ハ訴及ヒ被告ノ起シタル反訴ハ取下ケラレタルモノト看做サル

此規定ハ此法律ニ於テ別段ノ成規ナキ限リハ口頭辯論ノ爲メ定メラレタル總テノ期日ニ之ヲ適用ス

第四百三條（二百五十二）　闕席判決ヲ受ケタル原告又ハ被告ハ此判決ニ對シ故障ヲ申立ツルノ權アリ故障申立ノ期間ハ十四日トス（不可變期間ニシテ且此期間ハ闕席判決書ノ送達ヲ以テ始マル）

故障申立ハ判決ノ送達前ニモ（又ハ公ケノ各示ヲ以テ爲サルヘキ時）送達カ外國ニ於テ爲サルヘキ時ハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ（又ハ後日）口頭辯論ヲ經スシテ爲スヘキ特別ノ決定ヲ以テ之ヲ定ムル事ヲ要ス

第四百四條（二百五十三）　故障ノ申立ハ書面（闕席判ヲ爲シタル裁判所ニ）ヲ差出シ（シ）ニ因テ之ヲ爲ス

其書面ニハ左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一　故障ノ申立ヲ受クル闕席判決ノ表示

五月廿六日
制ル

五月廿五日
脱了

第二　此判決ニ對シ故障ヲ申立ツル事ノ陳述

其書面ニハ若シ原告又ハ被告ヨリ準備書面ヲ差出サヽリシ時ハ本事件ニ付テノ口頭辯論ノ準備ノ爲メノ必要ナル事項ヲモ亦掲クル事ヲ要ス然レ供此要件ノ欠缺ハ故障ノ申立ヲ有効ナラシムルニ影響ヲ及ホス事無シ

二百五十四
第四百五條　許スヘカラサル事ノ判然ナル故障又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テサル故障ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

却下ノ命令ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲ス事ヲ得

二百五十四
第四百六條　前條ノ場合ヲ除クノ外故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定ノ原告被告ノ參方ヲ呼出ス

二百五十五
第四百七條　裁判所ハ故障カ許サルヘキヤ否又故障カ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テラレタルヤ否ヲ審査スル事ヲ要ス

未定
法律ニ從ヒ爲サレタル云々ハ再考

二百五十六
第四百八條　故障ハ適法ニ申立ル時ハ訴訟ハ闕席アリシ前ノ程度ニ復セス

二百五十七
第四百九條　新辯論ニ基キ事件其モノニ於テ發スヘキ裁判カ闕席判決ニ包含セラレタル裁判ト符合スル限リハ此闕席判決ヲ維持スル事ヲ言渡シ其然ラサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢止ス

二百五十八
第四百十條　闕席ニ因テ生シタル費用ハ相手方ノ不正ナル異辯ニ因テ生セサル限リハ故障ノ爲メ變更スル裁判カ爲サレタル場合ニ於テモ其闕席シタル原告又ハ被告ニ之ヲ課ス

二百五十九
第四百十一條　故障ヲ申立テタル原告又ハ被告カ口頭辯論ノ新期日又ハ辯論ヲ延期セラレタル期日ニ出頭セサル時ハ第四百條ノ理由ノ一ニ關レサル限リハ出頭シタ

日本學術振興會

（修正ヲ新修トシテ入ル）

ル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却シ前裁判ヲ維持シテ新闕席判決スル新欠席ヲ言渡ス

新欠席

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツル事ヲ得ス

第四百十二條（二百六十）故障期間ヲ懈怠シタル原告又ハ被告ハ左ノ場合ニ於テ非常故障ヲ申立ツルノ權アリ

第一　原告又ハ被告カ天災又ハ其他避クヘカラサル事變ニ因リ法律上ノ期間内ニ故障ヲ申立ツル事ヲ妨ケラレタル時

第二　原告又ハ被告カ其過愆ニアラスシテ闕席判決書ノ送達ヲ知ラサル時

第四百十三條　非常故障ヲ申立ツルノ期間ハ七日トス此期間ハ障碍カ止ミタル日又ハ原告若クハ被告カ闕席判決書ノ送達ヲ知リタル日ヲ以テ始マル

懈怠シタル故障期間ハ終ヨリ起算シテ一ヶ年ノ滿了シタル後ハ最早非常故障ヲ申立ツル事ヲ許サス

第四百十四條　非常故障ヲ申立ツル書面ハ第四百四條ノ要件ニ相當シ且非常故障ノ原由タル事實ヲ明示スル事ヲ要ス

第四百十五條　其他ノ訴訟手續ニハ第四百五條乃至第四百十一條ノ規定ヲ準用ス然レ供其申立人ハ相手方ノ陳述アルモ之ニ拘ハラス非常故障ノ理由タル事實ヲ疏明スル事ヲ要ス

非常故障ノ許否ニ付テノ訴訟手續ハ本事件ニ於テノ訴訟手續ト之ヲ併合スル事ヲ得

二百六十條　故障ノ抛棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ抛棄及ヒ其取下ニ付テノ成規ヲ準用ス

二百六十一條　此節ノ成規ハ反訴又ハ原由ノ訴ニ確定シタル請求ノ數額ノ定ヲ目的物トスル手續ニ之ヲ準用ス

期日カ中間爭訟ニ付テノ辯論ノ爲メノミニ定メラレタル時ハ其辯

日本學術振興會

息手續乃ヒ解怠判決ハ此中間爭訟ヲ完結スルニ止メ且此節ノ規矩ヲ準用ス

民事訴訟法草案　第十六回

日本學術振興會